フェイトステイエクストラ

覇王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フェイトステイエクストラ

【Ｎコード】
Ｎ５５９４Ｕ

【作者名】
覇王

【あらすじ】
月の聖杯戦争に生き残った青年が、今度は冬木市でおこなわれる第５次聖杯戦争に巻き込まれる。そんな物語。

ちなみにこの話ではフェイト本編の主人公は登場しません。

あくまで作者が考えたオリジナル主人公が主役の話です。

プロローグ（前書き）

月の聖杯戦争を勝ち抜いた主人公が何の因果が、今度は冬木市の第５次聖杯戦争に巻き込まれる。そんな物語。

プロローグ

夢を…みていた。

二年前、交通事故の時の夢。

と言っても事故そのものの夢ではない。

トラックに牽かれかかった子供を助けようとして事故にあった。と言っても子供を助けた後に運悪く別の車に当たったのだ。

子供は気合いで守り抜いたが、俺自身はそうはいかなかった。

俺はその事故のショックで意識が別の世界に行ってしまった。

行き着いた別の世界では戦争が行われようとしていた。

聖杯を求めて。

魔術達によって繰り広げられる戦争

月の聖杯戦争が。

俺はその戦争に強制的参加させられ。

戦いに身を投じる事になった。

クラス・キャスターのサーヴァント、タマモと共に。

俺は魔術師でありながら近距離戦が得意だったのでタマモとは相性が良かった。

共に支え合いながら戦い抜いた。

一回戦は、自称親友と。

二回戦は、年老いた軍人と

三回戦は、幼い少女と

三回戦終了後、1人の女の子を救った。

四回戦は、吸血鬼と。

五回戦は、暗殺者と。

六回戦は、この戦いの中で本当の友人となった女の子と。

七回戦は、世界の王と。

最後には、この聖杯というモノを作った張本人と。

俺は戦い。

時には追い詰めれた。

だが、俺はその全てに勝利し生き残った。

聖杯戦争が終了した。

それは…タマモとの別れの時でもあった。

俺は……彼女と別れたくなかった。

……彼女がパートナーだったから生き残れた。

彼女以外のサーヴァントでは俺は途中で死んでいただろ。

しかし、俺は帰らなければならない。自分がいた世界に。

ゆえに…

俺は聖杯に願い。教えてもらった。

彼女を自分の世界でどうやれば召喚できるかを。

自分の知りたかった事を全て知る。

聖杯も、もう誰もアクセスできないようにし。

そして俺は自分世界に帰った。

気がつくと病院のベッドの上だった。

無事帰ってこれた。らしい。

近くの壁にかかっていた、カレンダーを見る

驚愕した。

事故にあったのは夏休み1日目だった。

今はもう9月。既に夏休みは終わっていた。

あの世界。電子の世界の1日はこちらの世界でも1日だったのだ。

悲しくて泣けきた。

……そこで気ずく。

自分が何か拳の中に握っていることを。

恐る恐る、拳を開く。

そこに握られていた物に……。

彼女の尻尾の様なアクセサリーだった。

それを見た瞬間、行動を開始する。

そうだ。

彼女を取り戻すんだ。

必ず。何があろうとも……必ず！！

……

それから約半年。

俺は色々と調べた。

サーヴァントとの事。

土地。霊脈。

その他、色々。今まではろくに調べ物なんてしたことなかったのでかなり苦労した。

それでも苦労のかいがあり、俺はタマモを取り戻す方法がわかった。

ある土地へ行きそこの霊脈を利用すればなんとかなるかもしれない。

その土地のある地域の名前は。

冬木市。

俺はそこの高校に進学することにした。

両親には渋い顔をされたが、なんとか説得。俺の熱意に負けたのか
両親も最後にはわかってくれた。

しかし、その土地へ引っ越すのは俺だけ。

両親は仕事の関係でくることはできなかった。

両親の仕送りだけをあてにするわけにはいかないので。

アルバイトと引っ越し先を探しに俺は一度冬木の町へ行った。

アルバイトも引っ越し先も案外あっさりと見つかった。

アルバイトとは、新都と呼ばれいる地区にある居酒屋のウェイター
兼雑用

引っ越し先はちょっとした武家屋敷。こっちは深山町と呼ばれてい
る地区。アルバイト先と真逆にあるので通勤は少々キツメだ。まぁ。
日課のランキングだと思えばなんとかなる。

屋敷は、１人で住むには広すぎるが……隣に住んでいたお姉さんとじいさんにちょっとした事でえらい気に入られ。事情を話したらここに住んだらといいと言われ…家賃も格安と言うかほぼ無料。俺はそこに住む事に決めた。

俺は冬木市の高校。

私立穂群原高校を受験し見事に合格した。

これでここで生活する為に必要なことは全てこなした。

少し月日は流れ……冬木市への引っ越し作業が終わった。かなり時間はかかったが。

ついにきたのだ！！

彼女と。タマモと再び会える時が。ようやく。

俺は屋敷の庭にあった土蔵の中にいた。

地面には複雑な魔方陣が描かれている

タマモ。

彼女に会うために必要な全てを調べ、必要な物は全て揃えた。

後は俺の魔力が聖杯なしでサーヴァントであるタマモを実体化させるに足りるかどうかだ。

儀式開始

……

儀式終了

魔力の方は心配なかったようだ。さすがに少しきついが、たいした問題じゃない。こーゆう時は魔術回路が１２８４本もある体に産んでくれた両親に感謝だ。

（ちなみに使用した本数は十分の１の１２８本ほど）

タマモ。

俺はそこでタマモと再会した。

嬉しいて涙が流れた。

嬉しくても泣ける。俺は流れる涙を止める事がしばらくできなかった。

月の聖杯戦争の終了と同時に消えてしまった彼女が、今自分の目の前にいた。

「お久しぶりです……マスター。」

彼女はあの頃と変わらない笑顔と声で答えてくれた。

しばらく泣いた後、俺たちは抱きしめ合い互いの存在を確かめあった。

しかし、その時俺は思いもしなかった。

今から二年後、自分が再び聖杯戦争に巻き込まれる事になるだなんて事はわかるわけ……なかった。

夢から……覚める。

プロローグ（後書き）

とりあえずタマモを取り戻す事に成功した主人公。次はフェイト本編に入って行きます。
聖杯戦争開始です。

フェイト／ステイ／エクストラ（前書き）

主人公の自己紹介＋ステータス
パートナーのタマモのステータス

フェイト／ステイ／エクストラ

主人公紹介

名前　聖都　和真（せいとかずま）

年齢　17歳

身長　177センチ

体重　86キロ

髪の色　黒

瞳の色　ゴールド

容姿

上の下

性格

基本的には優しいが、自分の大切な物や人などが傷つけられそうになると　静かに怒る。

戦歴

異世界でおこなわれた、月の聖杯戦争のただ1人の勝者。

使用魔術

強化、投影、固有結界

身体能力

かなり高い。

パートナー

キャスター、セイバーの二人

魔術回路の数

１２８４

フェイト流に書くとステータスはこんな感じ

筋力	A
耐久	A
敏捷	A
魔力	C＋
幸運	B
宝具	EX
保有スキル	
怪力	

対魔力
B
直感
B
戦闘続行
A
守る心
EX
（自分の後ろに大切な物、人がいると発動するスキル。スキル発動中は全ステータスがワンランク上がる。）

勇猛
A

主武装

近距離

エクスカリバー・ガラディーン

中距離

ゲイ・ボルグ
カズィクル・ベイ

遠距離

イー・バウ

全ては主人公が投影した投影品である

今は、エクストラの戦いで見た事のある宝具しか使えないが今回の聖杯戦争で新しい宝具を見れば使える宝具は増える。

月の聖杯戦争終了後から二年。今度は冬木市でおきる第5次聖杯戦争に巻き込まれる。

初めからキャスターのクラスのサーヴァントであるタマモがいる。そのためこの聖杯戦争では二人の英霊を使役する。

通常だと魔力が二分割され、一体一体のランクは下がるのだが和真は問題なく二人を万全な状態を維持できる。

今回の第5次聖杯戦争に勝利したさいに叶えて欲しい願いはタマモの受肉である。

参っているのは自分が体験した聖杯戦争とはルールが違い、今回の聖杯戦争は、バトルロワイヤル式と言うこと。現在のパートナーはタマモ。

次はタマモのステータスの確認。

筋力

C

耐久　C
敏捷　C
幸運　C
魔力　C
宝具　A＋
A

こんな感じです。

ステータスだけ見ると、サーヴァントとマスターの関係か逆ですね。

フェイト／ステイ／エクストラ（後書き）

次から聖杯戦争開始

聖杯戦争（前書き）

まだセイバーは来ません。

次の話で登場します。

聖杯戦争

このところ町が物騒だ。

新都方面のビルでガス漏れで、ビルの内部の人達が何十人も昏睡状態になったり。

民家の人が、刃物を持った通り魔に押し入られ殺される事件が多発している。

そして今、現状俺もそのヤバイことに捲き込まれている。

夜の学校。

二人の男と一人の少女いた。

一人は、赤い外套に白髪。

もう一人は青い髪に青いライダースーツといった全身青染め。

二人の男はグランドの真ん中で白と黒の双剣と深紅の槍で激しい火花を散らしながら殺しあっていた。

少女の方はただその場に立っているだけで何もしていない、いや正確には男二人の戦闘があまりにも人間常軌を越えているため、何も

出来ないのか。

戦っている男二人は凄まじい身体能力と魔力を持っている。
どうみても普通の人間ではないのは間違いない。

カズマは校舎の三階から柱の影に隠れながらそれを見ていた。

（あれは、まさかサーヴァントなのか）

俺はかって体験した月の聖杯戦争の事を彷彿させた。

「どうする、タマモを呼ぶか。」

いくら俺でもサーヴァントと二人を同時に相手するのは厳しい。

だが、タマモのクラスはキャスターだ。外で殺しあっている片方は槍を持っているところから察するに間違いなくクラス、ランサーだ。もう片方はよくわからないが、ランサーとまともにやりあっている時点で騎士タイプなのは間違いない。

となるとセイバーかアーチャか。どちらにしてもキャスターのタマモとは相性が悪い。

「ならどちらかが殺られてから乱入するか。」

そう考えながら見物場所を違う場所に移そうとした時。

バキィン。

何故か、一歩踏み出した地点に鉛筆が落ちており俺はその鉛筆を踏み砕いていた。

（ヤバイ。）

チラッと恐る恐る横目で窓から外にいた二人組を見る。

バッチリこちらを見て俺を睨んでいた。

（１００パー見つかってるー。）

ダッシュでその場から離れる。

逃げながらも一回だけ後ろに顔を向け見る。

ランサーらしきサーヴァントがこちらを追ってくる。さすがに速い、振りきれそうにないな。もう一体の方は追ってこない。

「…二体同時にこられるよりはマシか。」

追いつかれないように校舎を爆走する。

しかし。

「校舎内じゃすぐに捕まるな。」

バキィーーン

三階の窓から飛び降りる。スピードを緩めず自宅への道を走り出す。

すぐ後ろ３０メートルぐらい後にはランサーがいる。

（ぴったりついてくる、逃がさないつもりだな。……捕まったらど

うなるか……考えたくなあなー。）

……

ランサーと命がけの追いかけっこをしながら自宅へ到着する。

「ここなら少しばかり派手に殺っても大丈夫だろう。」

中庭でランサーを待ち構える。

「坊主、お前本当に人間か。サーヴァントじゃないのか？」

塀を越えてランサーが入ってくるなり飄々した口調で話しかけてくる。

「間違いなく人間だよ、俺は。」

カズマは普通に答える。

「そうかい。まっ、どっちでも俺がやることにかわりは、ないんだがな。……坊主悪いが死んでもらうぜ。」

「悪いがそう簡単に殺られてはやらないぜ、俺は。」

ランサー（？）は槍を構える。

「トレース・オン」

自分の魔術回路に魔力を通し戦闘体勢にはいる。

すると俺の手には両刃の西洋刀が握られている。

聖杯戦争（後書き）

次の話では。

セイバー召喚。

ランサーの撃退。

今回の聖杯戦争の説明とバーサーカーとの戦闘

この3つの話をいれます。

セイバーとの出会い。（前書き）

すみません。今回はセイバーとの出会いまでです。

次の話で聖杯戦争の説明と狂戦士と対面です。

セイバーとの出会い。

サーヴァントであるランサーと殺り合うのだから加減の必要はない。

「トレース・オン」

撃鉄を落とす。

魔術回路に魔力をひさびさに全開で通す。

自分が唯一使える魔術［投影］を使用する。

俺の手の中に両刃の剣が握られる。さっき見た双剣でもよかったったが、使いなれない武器よりは使いなれている武器の方がやり易いのでこちらにした。

剣を両手で持ち正眼に構える

「ほう、坊主。お前、魔術師か。なら少しは楽しめそうだな。」

ランサーが槍を構える。

「まぁね。」

お互いに向き合ったまま静止する。互いに探しているのだ、殺しあう為のきっかけを。

「……。」

「……。」

黙ったままにらみあう。

その時、空から石が墜ちてくるのを視界の端で確認、あれが地面に少しでも接地したら……

コツン。…小さい音を発てて小石が地面に落ちる。

ダッ！！。

ドン！！。

ついた瞬間、カズマとランサーは凄まじい音と共に相手に肉薄する。

「せい！」

カズマは両手で持っていた剣をランサーのどたまをかち割るつもりで降り下ろす。

「なめんなよ！」

降りおろされた剣をランサーは、槍を斜めにし柄で滑らし受け流す。

「ちっ。やっぱそう上手くはいかんか。」

わかってはいたが愚痴らずにはいられない。

「ほれ。いくぞ。坊主。」
ランサーは直ぐ様体勢を立て直し、高速の突きを繰り出してくる。
俺はソレを体を正面から横にしただけで回避する。
一撃目を回避し二撃目がくる前に、槍の腹を引き戻した剣をあて軌道をずらす。
「ちっ。」
ランサーが呻く。
俺は直ぐ様、距離をとり仕切り直す。ヤツの突きはかなり速いがかわせない訳じゃない。
俺にはしっかりとヤツの槍の動きが見えている。
……再び両者に距離ができた。
ランサーの方も今のきりつけの速度で警戒しているのか、攻めてこない。
（助かるな。時間をかければこちらの異常を感じ取ってタマモが帰って来てくれるハズ。そうなれば2体1でボコボコにすれば済むしな。）
しかしその考えは上手くはいかなかった。ランサーが距離を詰めて来たからだ。
「オラッ！」

「その程度で！！」

俺の喉元を貫こうと襲いかかる槍を剣で弾き迎撃する。

ガキィィィィン。

槍と剣で火花を散らしながらランサーとカズマは殺し会う。

ーーーーーーーー

カギィン。カギィン。カギィン。カギィン。

何回も何回も何回も、カズマとランサーは火花を散らしながら切りあい続ける。

お互いに体に小さな擦り傷等はできているが、致命傷には程遠く、ランサーもカズマも攻めあぐねていた。

「「ふっ。」」

同時に距離をとる。

離れたらつい言葉がでる。

「やるね、ランサー…まさかここまでできるとは思わなかった。」

片手を剣の柄からはなし、頬にできた切り傷の血を手の甲で拭いながら、誉める。

「…坊主とはもういわねぇ。名を聞いとこうじゃねぇか。」

ランサーは槍を構え油断なくこちらを見ながらも一人の戦士としてこちらに興味もでてきたのだろう。名を聞いてきた。

「光栄だよ。それは俺を倒すべき敵と見てくれているって事でいいんだよな。」

「ああ、そうだ。」

「なら答えよう。俺の名前は聖都和真だ。」

堂々と胸を張り名乗る。

「カズマか……良い名だ。」

ランサーは獰猛な獣のように笑った。

「ならカズマ。人間のお前がサーヴァントである俺を相手にここまでやったのだ、見せてやろう。我が宝具を!!」

「宝具だと!!」

宝具使用宣言と共に更に飛び退くランサー。カズマとランサーの間にはかなりの距離ができる。

「??なんだ。あんな遠くから何をするつもりだ?」

遠くに行ったランサーはその場でまるでクラウチングスタートのような感じで構える。

「うけてみるがいい。我が魔槍……」

ランサーが走り出す。そして勢いが最速に達したら今度は空高くジャンプ。そうしてからこう叫ぶ。

「ゲイ・ボルグを！！」

手に持っていた深紅の槍を投げつけてくる。

ランサーが宝具の真名を解放した瞬間に辺りの空気が凍った。いや正確には周囲の魔力が凍ったのか。

とにかく寒くもないのに肌に突き刺すよいに痛くなる。

深紅の槍が凄まじい魔力とスピードでカズマに迫る！

「おいおい、ゲイ・ボルグって…まさかコイツ、クー・フーリンか！！」

ケルト神話の大英雄じゃないですかーーー！！

迫る槍を防ぐ為、腰を落とし地面に根をはるかのようにどっしりと構え、剣を縦から横にし、剣の腹の部分で受け止めるための準備をする。

ドゴォォォォォォォォォォォォン

まるでナパーム弾が着弾したような轟音が辺りに鳴り響く。

「終わりだ。あばよ。」

ランサーは地面に着地し、槍が突き刺さっているであろう場所に目を向ける。

その顔が驚愕に染まり、目を見開く。

信じられない光景がランサーの前に広がっていたからだ。

「おいおい。カズマ、お前本当に人間か？」

ギギギィィィーーーーィィィィーーーーンンン。

金属同士が削れあっているような切削音。

カズマが自身の持っていた両刃の剣の腹で見事にランサーの宝具を防いでいた。

「ぐぅぅぅ。ヤバイ、止めきれない。」

だが、槍の威力で足の下の地面は軽く陥没し、それでもなお止まらず徐々に後ろに押されていく。

「たいしたモンだ。たが限界だな。」

その通りだった。遂にカズマは押しきられ剣が上にかちあげられる。

「しまっ。」

深紅の槍は深々と突き刺さる。……ただし地面だが。

カズマの剣に当たり軌道がずれてしまった結果だった。

ドゴォォォォォン

再び爆音が響く。

ランサーの放った槍が刺さった所は軽いクレーターのようになっていた。

衝撃を至近距離でしかも体勢を崩していたカズマは耐えきれず後方へ吹っ飛んでいく。

吹っ飛んだ先にはカズマが普段魔術の修行をしている土蔵がある。

「なんの！！」

武術の達人であるカズマは空中で回転しながら体勢を立て直し、土蔵の鉄製の扉に足から着地するのに成功する……が。

扉はカズマの着地の衝撃に耐えきれず金具が壊れてしまい扉は外れ、急に足場を奪われカズマも扉と一緒に土蔵の中へと転がって行った。

「のわっ！？」

ビックリしながらもなんか体勢を立て直そうとするが、一緒に落ちている扉が邪魔でうまくいかず、背中から土蔵の硬い床に打ちつけた。

「いってーー！」

背中を強打した。

それでも剣は手離さなかった自分を褒めてやりたい気分になった。

剣を杖の代わりにして立ち上がろうとした時にはランサーが目の前で槍を　構え、カズマの眉間に突き刺そうとしていた。

（ヤバイ。死ぬ）

時間の感覚が延長されて全てがゆっくりに見える。

深紅の槍が自分の眉間を貫こうとしているのがひどく遅く見える。

だが着実に槍は眉間に近ずいてくる

避けようとするが、カズマ自身の動きもひどくゆっくりになっており、とてもじゃないが回避できない。

（死ねない。死ねない。死ねない。死ねない。死ねない。まだ俺は、死ねないんだ。）

カズマが無駄と分かりつつも、ランサーの攻撃を避けようとしていると、急に地面が光だした。

「な、なんだ！！」

ランサーも動揺し槍は眉間数ミリ手前ギリギリの所で止まる。

（なんだかわからんが……スキありだ！！）

槍の懐に素早く入り込みランサーの腹に渾身の蹴りをお見舞いする。

「グハッ！」

土蔵の外まで派手すっ飛んでいく。

ろくに防御もせずまともに蹴りをくらうランサーに疑問を覚える。

（？なぜ防御しなかった。ヤツの反応速度なら防げたハズ。）

光が収まると同時にその疑問は解消された。

なぜなら、ものすごい魔力を感じた。俺の後ろにサーヴァントがいる。

後ろに振り向く。

そこにいたのは。

金髪で。綺麗というより可愛い感じの顔つきで。

小柄で、西洋甲冑のような鎧を着込んでいて。

手に不可視の剣を携えていた。

彼女が斬り込んだから、ランサーはカズマの蹴りを防げなかったのだ。

そして彼女はその姿と良くあった凛々しい声で、尋ねてくる。

「問おう、貴方が私のマスターか。ーーー」

これが、カズマとセイバーとの出会い。

そして第5次聖杯戦争の始まりだった。

セイバーとの出会い。（後書き）

ゆっくり進んで行こうと思います。

三人チーム（前書き）

聖杯戦争開始

バーサーカーとの戦闘

まで書きました。

三人チーム

思わず目が奪われる。その位、美しくて同時に可愛いらしい少女だった。

幻想的な風景だ。

何てことない土蔵が今、自分の前に立っている少女のお陰で素晴らしいく幻想的な空間に変貌している。

凛々しい声で尋ねてくる。

「問おう。貴方が私のマスターか？ーーー」

半端ない存在感を醸し出しついる人に聞かれカズマは一瞬、気後れしそうになるが……直ぐに気を持ち直す。

「誰だ、お前は。」

「サーヴァント・セイバー召喚に応じ参上した。」

堂々と言い切る。

淀みなどまったくなかった。

「マスター……サーヴァントだと。」

「はい。」

セイバーと名乗った少女が俺の左手に刻まれた幾何学的な紋章に目を向ける。

「貴方の左手に刻まれた令呪がその証。」

「これより我が剣は、貴方と共にあり……貴方の運命は私と共にある。」

そして強い決意の表情で語る。

「ここに、契約は完了した。」

言い終わると、セイバーは土蔵の外に目を向ける。

「先ほどの敵は、すでに逃げたようですね。」

少しばかり残念そうにしている。

「それは助かるな。セイバーって言ったか。すまんが俺には、知識がない、お前が言っている聖杯戦争とはなんなんだ？」

俺が体験した月の聖杯戦争とは何が違うのかが、知りたかった。

「『聖杯戦争』……それは聖杯を求める7人の魔術師（マスター）による殺し合い。聖杯とは所有者のあらゆる願いをかなえる存在。ーーーーーそして貴方は選ばれたのです。この儀式にマスターの1人として…！」

……どうやら基本的なことは同じようだな。

後は。

「……なあ、セイバー。聖杯戦争の仕組みについてもう少し詳しく…」

今回の戦争の仕組みをさらに、詳しく聞こうとしたらセイバーに手で遮られた。

そこでカズマも気ずく。

サーヴァントが2体こちらに近ずいてくるのを、感じとった。

「……セイバー。」

「新手です。マスターは逃げてください。ここは私が抑さえます。」

そう言うとセイバーは、近い方の気配の方に走り出した。

「おい。まて、セイバー。そっちのいるヤツは」

直ぐ様、俺はセイバーを追って走り出す。

セイバーはランサーほど速くはなくすぐに追い付くことに成功する。

「マスター、なぜ。」

「そっちから来てるヤツは敵じゃないが！味方だ！！」

「なにをバカなことを。」
セイバーとカズマは並走しながら口論しついると……

「マスターーー。ご無事ですかーーーー。」

前方から狐耳に露出過多な変則的な着物をきた女性が近ずいてきた。

キャスターのタマモである。

セイバーはタマモを目視で確認した瞬間に立ち止まり、手に持っていた不可視の剣を構える。

タマモも自分以外のサーヴァントがカズマの側にことに警戒し自身の武器である、鏡を手に携える。

「キャスターのサーヴァントだな。最弱のサーヴァントである貴方がそちらから来るとは。」

「貴方……何者ですか。なんで私のマスターと一緒にいるのか……ご説明願いたいですね～。」

2人から殺気が溢れでる。

「まてまて、2人とも落ちつけ。」

カズマが2人の間に割り込み説明をしようと試みる。

「マスター。まだ世迷いごとを言うのですか。」

セイバーは反論しつつキャスターにいつでも斬りかかれる姿勢になる。

「マスター。離れていてください。この泥棒猫を、すぐさま火葬しますから。」

キャスターも胸元から数枚の呪符を取りだし戦闘体勢に入る。

カズマを無視して殺し合おうする2人にカズマは2人以上の殺気を放つ

「やめろ。……2度は言わんぞ。」

「「……はい。」」

2人揃って頷いた。

……

……

3人で家に帰ってくると庭に人影が2つあり。魔力の大きさから1人は間違いないなくサーヴァントである。

カズマとセイバーは前に出て剣を構え、キャスターは2人より少し後ろで援護できるように呪符を取り出した。

3人を代表してカズマが2人に話しかける。

「人ん家に不法侵入している君達は、一体何者だ。」

「あら、無事に帰ってくるのは予想外だったわね。最悪、もう戻って来ないと思っていたのに。」

人間の少女の方がこちらに振り向く。

その顔を見てカズマは驚く。

「遠坂……凛……なのか。」

「私もまさか自分のクラスメートが魔術師で、マスターになるなんて思いもしなかったわよ。」

遠坂はあからさまにため息をついた。

ーーーーーーーー

「ところで聖都くん。君、この戦争…『聖杯戦争』についてどこまで知っているのかしら？」

夜の町を歩きながら遠坂は尋ねてきた。

「詳しくは知らないが、基本的なシステムは、セイバーから聞いたし、知っているさ。ようは、7人のマスターとサーヴァントに最後の1組になるまで殺し会えってんだろ。」

「なんだ、知ってるじゃない。ド素人って訳じゃないわけね。」

遠坂は感心したように、ウンウンと頷ずいている。

当たり前だ。これでも一度は優勝してるんだよ、聖杯戦争にさ。別世界のだけどさ。

「まっ、詳しい事は今から行くヤツに聞けばいいわ。」

そうなのだ。今、俺達はある場所に向かって歩いているのだ。

俺、セイバー、キャスター（タマモ）、遠坂、遠坂のサーヴァントであるアーチャの5人でだ。

キャスターは、露出過多な着物ではなく。洋服に着替えている。

セイバーも騎士甲冑のままでは目立つので、着替えさせた。

アーチャはそのままの格好だ。目立つので着替えるように言ったが聞く耳持たず。なら、せめて幽体化しているようにとも言ったのだが再び聞く耳持ってもらえず。……仕方なく、そのままついてくることになった。

「で、俺達はどこまで歩けばいいんだ。どこか向かっているんだ？」

「町の外れにある教会、言峰教会よ。そこにいる神父が、この戦争の『監督役』をやってるのよ。」

ーーーーーーーー

「着いたわ。」

しばらく歩いて着いた場所は、何て事はない。何処にでもありそうな、普通の外装の教会だった。

「安心して。ここの神父とは、古い知り合いだから危険はないわ。」

遠坂はそう言うが俺にはとてもそうは思えない。なぜだかわからないが、ものすごく嫌な気配が
辺りから漂っているからだ。

思いふけっているとセイバーとキャスターが話しかけてくる。

「私は外で待ってますね～。私が一緒に行くといろいろめんどくさいことになっちゃいますし。」

「マスター。私はここで外敵に備えます。……良くない空気です。貴方も決して油断しないように。」

「わかった。」

そうしてカズマと遠坂は教会の中に入る。

「綺礼！いるんでしょう？7人目のマスターを連れてきたわ。」

遠坂が大きく声をかけると物陰から1人の男が姿を現した。

「おおーーそうか。」

姿を見せた男には見覚えがあった。そいつは間違いなく、あの神父の原型になった男だった。

「ようこそ少年。私は言峰綺礼という。」

……綺礼……名前まで同じかよ。

「あんたが、聖杯戦争の監督役ってやつか？」

「そうだが、君の名は？」

「……聖都和真だ。」

「そうか、それでは聖都和真。君が最後のマスターというわけか……」

「聖杯戦争についての説明、もしくはルールを知りたいな。教えてくれるんだろ？」

「もちろんだ。何が知りたい？」

「……まずはーー」

……［説明中］

「ーーー聞きたい事は以上かね？」

「ああ。説明ありがとな。」

「なに、当然のことをしただけだ。礼を言われる覚えはない。それでは聖都和真を最後のマスターと認めよう。」

祭壇の上に立ち宣言する。

「ここに聖杯戦争の開幕を宣言する。各自がおのれの信念に従い、思う存分競い合え。」

それを聴いた遠坂は踵を返し出口へ向かう。

「それじゃもう、ここに用はないわね。いくわよ、聖都くん。」

「あ！待てよ、遠坂…」

遠坂に促されて俺も出口へ向かって歩き出す。

カズマは稟と一緒に教会から出る。

いろいろと勝手が違うところもあるが……これは間違いなく聖杯戦争…敗北はそのまま死に繋がる。

……俺はまだタマモと生きていたい。

こんなところで死ぬ訳には断じていかない。

カズマは決意をあらたにする。

教会から出てしばらく歩き十字路に着くと。

ここでくるまでみんな無言だった。

「ここで別れましょう。聖都くん。次に会うときは敵同士よ。」

それにセイバーが応える。

「無論です。こちらも手加減しませんよ。」

キャスターも。

「当然です。今回は見逃してあげるだけですから。」

遠坂は歩き出しながらいう。

「サーヴァントを2体も従えているんだから当然か。ま、調子に乗りすぎて、せいぜい早死にしないようにね。」

「じゃあね。」

「じゃあな。」

遠坂が見えなくなるまで見送ろうとしていたら、遠坂は歩き始めて十歩も歩かないうちに止まった。

遠坂の目線の先には、小さく女の子が立っていた。長いコートにマフラー、帽子をかぶっている。いくら冬だからといってもかなりの重装備である。一目で日本人ではないのがわかる、白い雪のような肌に宝石のような瞳をしている。おそらくロシアの人だと思う。

年齢は…中学生ぐらいか？

「あらーーもう帰っちゃうの？夜はまだまだこれからだっていうのに。」

流暢な日本語で話す。

「こんな時間にどうしたんだキミ。」

カズマが話しかけると女の子は優雅にスカートの裾を掴みお辞儀をする。

「はじめまして、私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと言えばわかるかしら。」

「なんですって。」

遠坂が大きな声をだす。

「知っているのか？」

「ええ。アインツベルン……聖杯の入手を宿願とする魔術師の家系。毎回この戦いにマスターを送り込んできているヤツらよ。」

「ということは……あの子もマスターということか。」

「そうだよ。」

イリヤスフィールが笑顔を浮かべながら返事をする。

「さあ、戦争を始めましょう。おいでバーサーカー！」

ズン！！

地響きを発てて何が降り立つ。

イリヤスフィールの横に、出現したのは……体長３メートルはありそうな鉛色の体をした巨人だった。

（これがバーサーカー……でかいな…だがコイツぐらいなら。）

「どうしたの？ぼけっとしているなら、こっちからいくからね。」

ぼけっとなんかしてねーって。

まるで呼吸をするかのごとく、投影を使い両刃の西洋剣を手のひらに出現させる。

「いけ！バーサーカー！そいつらみんな叩き潰しちゃえ！！」

バーサーカーがいつの間にか握っていた。バカでかい、岩から削りだして造ったような斧剣を持ち、ものすごいスピードで接近してくる。

斧剣を振り上げる。

「マスター。逃げてください。」

セイバーが俺を守ろうと前にでようとする……が。

「セイバーはキャスターを守れ！」

前にでようとするセイバーを押し退け、俺がバーサーカーの斧剣を弾く。
ガキィーーン。
カズマの剣とバーサーカーの斧剣が火花を散らす。

（っつ……剣撃はかなり重いな。まともには受けず、流すほうがよさそうだ。）

「「マスター！」」

「大丈夫だ！！それよりは二人とも、やるぞ！」

「はい。わかりました。」

「了解です。さっさと終わらせてお家に帰りましょう、マスター。」

キャスターも臨戦体勢にはいる。

カズマ達の様子を見て、イリヤスフィールは不思議そうに小首を傾げる。

「サーヴァントが二体？あれれ、おかしいなぁ。」

イリヤスフィールが不思議がっている間にもバーサーカーの猛攻は続いている。

ガキィンガキィンガキィンガキィン。

バーサーカーが斧剣を振るう度にバーサーカーの体に裂傷が次々に増える。

バーサーカーは現在セイバーとカズマの二人を同時に相手をしている。セイバーはバーサーカーの斧剣をさばくだけで、手が一杯だが、カズマの方はそうではなく、斧剣を巧みに流し、回避してバーサーカーの体に剣で斬りつけている。

「固い体してやがんな。なかなか致命傷にならない。」

もう数十回カウンターぎみに斬りつけてもバーサーカーはたおれない。

「おそらく、あれがバーサーカーの宝具です。」

セイバーは推理する。それはカズマも同感だった。それ以上の何かもありそうな気もするが……試してみるか。

「キャスター！足を潰せ。」

「はい。了解です。マスター。」

いままで、マスターのイリヤスフィールを狙わせてバーサーカーの動きを制限させていたキャスターに指示をだす。

胸元から呪符を取り出しすキャスター。

「凍りついちゃつてくださいね。」

キャスターがバーサーカーの足元に呪符を投げつける。瞬間、バーサーカーの両足が凄まじさ勢いで凍結しはじめた。

「ーーーーーーーー!!」

バーサーカーが咆哮をあげる。凍らせた足の氷がすぐさま砕かれ、あまり足止めにはならなかったがカズマにはそれで十分だった。

「うわっ、スッゴいバカ力です。」

キャスターがうんざりしたような声をあげる。

「そんなものじゃ、バーサーカーには効かないよ。」

イリヤスフィールが嘲笑する。

「はじめっから効果あるなんて期待していないよ。」

次の瞬間、大口あげたバーサーカーの口わカズマの剣が貫通した。

「外は固いようだが……中はそうでもなかったみたいだな。」

鮮血がバーサーカーの口から溢れ出てカズマの体を汚した。

「マスター!」

「よくやったわ。」

「さすがです、マスター。」

セイバー、遠坂、キャスターがガッツポーズをとる。

バーサーカーの動きが止まる。

「遠坂、少しは手伝ってくれても良かったんじゃないか？」

バーサーカーの口に剣を突き刺したまま俺は遠坂に愚痴る。

「私達の援護なんて必要なかったじゃない。」

「そりゃそうだけどさ。」

納得できんなそんな表情でカズマは剣を引き抜こうとした……がやめた。

なぜなら……バーサーカーはまだ生きているからだ。

「予想どうりだな、ただ体を' 固く' するだけ、そんな物が宝具になるわけないしな。」

カズマがつけた傷が煙をたてて消えていく。

バーサーカーは完全な状態まで回復してしまった。

「再生……いや、もっと高度な力…コイツは間違いなく一度は死んだ。死んだ後に蘇った。……！まさか自動蘇生（オートレイズ）か！！」

もしそうなら破格の宝具だぞ。

「ーーーーーーー！！」

バーサーカーが再びバカデカイ声で咆哮をあげ、斧剣を持っていない方の腕で顔に張りついたままの俺を振り落とそうと振るってくる。

「ちっ。」

剣を顔から引き抜き腕が当たる前にジャンプし空中に逃れ、地面に着地と同時にセイバーとキャスターが近ずいて来る。

「ご無事ですか。」

「もぉーー。あんまり無茶しちゃダメですよ、マスター、心臓止まるかと思いました。」

「すまんすまん。」

剣を構え直しバーサーカーを注視しつつ、タマモに尋ねる。こういったやりとりをしていると月の聖杯戦争を思い出すな～。

「キャスターどう考える、俺はアイツの宝具は自動蘇生だと思うんだが。」

「おそらく間違いかと。」

タマモがカズマに同意する。

「自動蘇生。……どうやれば倒せるんだ。」

セイバーが弱音をはく。

「なに弱音吐いてるんだセイバー。自動蘇生なんて破格の能力…必ず回数に限界があるはず。」

カズマがバーサーカーに向かって剣を突きつける。

「なら話しは簡単、バーサーカーが死ぬまで切り刻んで殺し続ければ済む。」

カズマの体から魔力と闘気が溢れる。

「さあ、戦闘続行といこう。」

「さすがぁ、マスターカッコいいです。　惚れなおしちゃいますぅ～～。」

「すみませんマスター、私としたことがらしくない発言をしてしまいました。」

タマモは両手を真っ赤な顔の頬にあて体をくねくねと曲げていて、セイバーは謝罪をし、気を引き締めた。

「よし、二人とも……行くぞ！！！！」

「「はい（了解）」」

カズマの声を合図に3人はバーサーカーに突撃する。

ーーーーーーーー
ーーーー

ドォォォォォン。

バーサーカーが地面に体を倒した。

「セイバー、キャスター、二人は何回殺した？ちなみに俺は合計三回だ。」

「私は心臓を貫いて殺した一回だけです。」

セイバーは肩で息をしている。

「マスター、私も一回だけです～～。口の中に呪符を叩き込んで体の内から焼きましたから～。」

キャスターも辛そうだ。

（これ以上の戦闘は二人が持たないな。さてどうしたものか……宝具を解放するのも選択肢に入れないとな。）

二人の盾になるように前に出る。

「ーーーーーー！！！！！」

傷が治り再び立ち上がり、咆哮をあげバーサーカーは斧剣を振り上げる。

「もういいわ。帰るわよ、バーサーカー。」

イリヤスフィールがそれを止める。

バーサーカーの斧剣が止まり、姿見えなくなる。幽体化させたようだ。

「なんだ、なんで止めた。まだ蘇生のストックはまだ残っているのだろう。」

急に戦闘をやめた相手を怪訝に思い真意を聴くことに。

「別に……ただの気まぐれ。また殺しに行くからね。」

そう言い残すとイリヤスフィールはこの場を去っていった。

（普段なら追っかけていくところだが…今回は別にいいだろ、戦争はまだ始まったばかりな訳だし。）

余裕ができ辺りを見渡すと、遠坂がいつの間にかいなくなっていた。

一体どこに行ったのだろう。

「マスタ～～、私もう限界です～～。家まで抱っこでつれていってきれると嬉しいな～～。」

「マスター。追わなくてよいのですか？あのまま続けていれば我々が勝利しました。」

後ろにいたセイバーがそう言ってくる。

「その場合俺達の誰かが重症、もしくは殺られるだろう。聖杯戦争はまだ始まったばかり、そんな急ぐことはないさ。」

投影で造り上げた剣を消し、本当にお疲れのようなのでキャスターをお姫様抱っこして、帰路につく。

「マスターの腕の中サイッコうです～～。」

タマモはさらにカズマの首に手を回し、頬ずりしている。

「……キャスター、破廉恥だぞ。」

「自分はこんなこと出来ないからって、あたるのはやめてくれませんか。セイバー。」

キャスターはスリスリしながらセイバーに辛辣な言葉を返す。

「貴様！！」

怒ったセイバーが不可視の剣に手をかける。

「やめい、二人とも！」

カズマはギャアギャアと言い合う2人をなだめながら帰路につく。

……ここに第5次聖杯戦争が開催された。

最後まで生き残り聖杯を手にするのは一体誰になるのか……それは誰にもわからない。

三人チーム（後書き）

つぎは、

学校にはられた結界。

ライダー、キャスターとの遭遇戦。

ぐらいまで書きたいです。

学校での死闘（前書き）

会話の流れが変なところとかあるかも知れませんが広い心で読んでくれと嬉しいです。

作者のコミュニケーション不足と文才不足のせいですね。

すみません。

学校での死闘

バーサーカーとの戦闘した、次の日カズマは学校に普通に登校していた。

いつもの時間、いつもの通学路を歩いている。

「セイバーは心配性なんだよな。」

カズマは昨日の夜と今朝の出来事を思い出して、苦笑いしていた。

……昨日の夜。

3人で家に帰り、セイバー、キャスター、カズマの順で風呂に入り、遅めの晩飯を食べまったりしているとセイバーが今後ことについて話しだす。

この間に、風呂に入る順番などでセイバーとキャスターが揉め、決まったら決まったらでキャスターがカズマと一緒入ると言い出し、再び揉め、1人ずつ入り、入っていない2人は互いを監視し合う、案をカズマが提案し収まった。

「それではマスター、これからどうするつもりですか?」

3人は今、屋敷の居間にいる。

「その前にセイバー、俺のことは名前で呼んでくれ。どうにもキャスター以外にそう呼ばれるのは違和感があるんだ。すまないな。」

「……ではカズマでいいですか？」

「ああ。」

「マスターをマスターと呼んでいいのは私だけ。ふふふふふ。」

タマモが幸悦な表情になる

そして、違う世界に旅立とうしているのが、今は無視。そうしないと話しが進まない。

「でだ、どうするって、何がだ？」

「今後の、作戦のことです。」

この言葉を聴いたとたんに、タマモが違う世界から戻っきて真剣な顔になる。

「現状の我々の戦力から今からバーサーカーの所に攻めいっても勝てるでしょうし……カズマが戦ったランサーであれば手の内もしれているから十分に勝機がある。朝になったら探索さて、まずはこの2体のサーヴァントから倒したらどうでしょうか？」

「確かに、そうだが……悪いがセイバー、俺は真っ先に倒したい相手がいるんだ。」

「そうですね。まずはマスターが通っている学校でおいたをしているおバカなサーヴァントを先に殺るのが優先に決まってます。」

……今朝

朝食が終わり、学校に行くまでの時間をテレビを見ながら過ごしているとフッと気になることが頭に浮かんだので聴いてみることに。

「なぁ、セイバー。セイバーの真名ってなんなんだ。」

「それは……」

セイバーが言い淀む。

「あーっ、言いたくないなら別に無理して聴かないから、でもその内教えてくれよ。」

「……はい。」

2人で話しいると、台所で朝食の洗い物綺麗にしていたタマモが洗い物をマッハで終え。

「なに、2人で見つめあって、いい雰囲気作っているんですか！！」

おぼんに人数分のお茶を入れた茶碗をもってカズマとセイバーの間に割り込んできた。

茶碗をテーブルの上に乱暴に置く。

「マスター、そろそろ学校に行かないと時間ヤバくないですか？」

タマモにいわれて、壁にかけてある時計を見る。……たしかにそろそろ行かないと間に合いそうにないな。

「それじゃあ、セイバー。俺は学校に行く。大人しく留守番しとけよ。」

自室に戻り、制服に着替え鞄を手に取り、玄関に行く。

「マスター、いってらっしゃいませ。」

タマモが玄関までついてきてくれてる。

「キャスター、今日は夕方に学校に来てくれ。……結界を消す。これ以上やらせるわけにはいかないからな。」

「了解です、マスター。では夕食の下準備をしたら参ります。」

「ああ。じゃ、いってくるよ。」

玄関の戸をあけ、家を出ようとすると、セイバーが。

「カズマ、やはり我々の内どちらかがついていくべきでは。」

「いらないよ、セイバー。これは' 釣り' って言う、囮技なんだ。俺自身を餌にして敵のマスター、サーヴァントを誘きだすんだ。」

「マスターが我々、サーヴァントひけをとらないということは、昨日のバーサーカーとの戦闘でわかりましたが…ですが……危険です。」

セイバーが渋る。

心配性のセイバーだ。

「セイバー……大丈夫だって魔術師は隠匿されるモノだからな。昼間っぱから仕掛けてくるバカはいないだろうし。この行為だって俺が、マスターですよ。仕掛けてきてきていいよって宣伝するだけだしな。」

「ですが……。」

「じゃ、いってくるよ。2人共。」

カズマは玄関を出ていく。

そして……初めにもどる。

学校に着く、……昨日より違和感が強くなっている。奴さん順調に準備を進めているらしいな、さっさとかたずけないといつ結界が発動するかわかったもんじゃないな。

校内に入って行き、靴から上履きに履き替える為、自分に割り当てられた靴箱を開ける。

靴箱を開けると中に手紙が入っていた。一瞬ラブレターか、なんて思ったがそんな色っぽいモノではなかった。

どっちかというと果たし状みたいな感じだった。

果たし状……もとい手紙にはこう書いてあった。

'放課後屋上で会えないかしら?'

誰からだ?…遠坂かな…。とりあえず、放課後屋上に行ってみるとしよう。

午前中の授業が終わり、昼休みになる。

カズマは、いつもどうりタマモが作ってくれた弁当を食べる。タマモは召喚された当時は料理なんて、てんでできなかったが今は練習しまくって……かなり上達した。

食事をしながら遠坂の方をさりげなく見る。向こうも食事をしていると思ったが…すでに弁当の箱の蓋は閉じている。

もう食べおわったのか……早食いは体に良くないんだが。

しかし、なんでまた手紙なんだ。何か要件があるのなら直接、口でいった方か早いとハズなんだけどな。

不思議だ。

キーンコーンカーン。

昼休みが終わった。あとは午後の授業を受けて、放課後屋上行くとしよう。

放課後。

担任の先生に用事を頼まれ、こなしている内にかなり時間が過ぎてしまった。

急いで屋上へ向かう。

「遠坂、帰ってなければいいんだけど……」

しかしカズマは、あともう少しというところで足を止める。

キャーーーー!!

「……今、悲鳴が聞こえなかったか？」

遠坂をこれ以上待たせるのは悪いと思ったが気になるので、悲鳴が

聞こえた所に行くことにした。

悲鳴が聞こえた所は二階の通路の端のところからだろう。今現在、カズマは三階の屋上一歩手前の踊り場にいる。

一足で二階に続く階段までいき、飛び降り一気に二階へ降り立つ。

悲鳴をあげたであろう人物はすぐに見つかった。

カズマの正面に見える、通路の端、非常階段の手前に1人の女子生徒が倒れていた。非常階段のドアが開いている……この子襲った犯人はここから逃げたのだろう。

「おい、お前大丈夫か?」

ダッシュで近ずき、床に俯せて倒れている女子を抱き起こす。

「……。」

返事がない。

女子の首の下に膝を、背中に自分の太ももをあて、両手をあける。

そして口に手を当て、首で脈を確かめてみる。

するとどうだ。この女子は呼吸がとても弱く今にも止まってしまいそうだし、脈もとても弱い。

外傷の様子はない。だとしたらなぜ?

「んっ?なんだ、首筋の所になにか……。」

そこには2つ穴が空いていた。まるで吸血鬼にでも噛まれたようなきずだった。

その傷をみてカズマはピンときた。改めて倒れていた。女子生徒を眺める。

「……なるほど、そういうことするわけだ。」

この子はサーヴァントに襲われたのだ、そして生命力の源である血液と一緒に少ない魔力もごっそりともっていかれたわけか。

魂食い、サーヴァントを強くするなは有効な手だが…かなりムカつくことをしているマスターもいたもんだな。

カズマの心に怒りが灯る。しかし今は静める。この怒りはこんなことをしたマスターと殺しあう時までとっておくことにした。

体温もかなり低下している。このままにしておけばこの女子が死ぬのは時間の問題だった。

（助けたい、助けたい……が……俺にはこの子を助ける手段がない。こういうときは投影しか魔術が使えない自分が情けないな。）

どうしようかと悩む。悩んでいる間にもこの子は確実に死に近ずいている、手遅れになる前になんとかしないと。

どうしようかと頭を抱えて考えいると、横なら切羽詰まった声が聞こえきた。

「ちょっと、聖都！その子どうしたのよ！」

声の主は遠坂だった、カズマが全然来る気配ないものだから探しにきたのだろう。

カズマは振り返る。

「遠坂か、ちょうどいいところに。」

「どきなさい、その人そのままじゃ死ぬわ。魔力と血液をギリギリまで盗られてる。待ってなさい、このくらいなら手持ちの宝石でもなんとかなるから。」

遠坂はカズマを押し退けて女子生徒の前に膝まずき、スカートのポケットから何個かの宝石を取りだし、応急処置しようとする。

「死なないでくれ。」

カズマは呟く、このまま死なれたらものすごい後味が悪い。

「聖都くん！そこの非常階段のドア閉めてくれないかしら！髪が乱れて集中出来ないわ。」

遠坂に言われカズマは非常階段のドアに近ずき閉めようとする。

ヒュン。

しかし、カズマが完全にドアを閉じる前にドアと壁の隙間から何かが飛び出してきた。

急に入ってきたことと、入ってきた物体の小ささ、そこそこのスピードだったこと、この3つの要素の為、どんな物かは完全には目視で確認できなかったが、その何かは遠坂の横顔に突き進む。

嫌な予感がしたので、その'何が'をカズマは遠坂に当たる前に掴みとる。

「遠坂、危ないぞ。」

「えっ？」

遠坂が驚いた声をあげる。危なかった。横からかつとんで来ていた物体に、気ずいてなかったようだ。

「遠坂。その子助かりそうか？」

「ええ、なんとか。それよりは聖都くん、一体何があったの？」

たった今掴んだ'何か'を遠坂に見せる。それは……鎖つきのデカイ釘のようなモノだった。どう見ても武骨い武器だった。

「これが、閉めようとしたドアの隙間から飛んで来たんだ。遠坂、お前の頭を狙ってな。」

「っっ！！」

遠坂の顔色が青くなる。そりゃそうだろうな、もしカズマが止めてなければ遠坂は死んでいたのだから。

「遠坂、この場を任せていいか？俺この釘みたいなモノを投げつけてきたヤツに用ができたんで、そっちに行きたいんだ。」

「……それ、間違いなくサーヴァントの武装よ。」

「だから行くんじゃないか。いきなりこんなモンを投げつけてくるヤツを放っといたら安心して学校生活を送れない。」

そこでカズマは一度をきる。

「だから、かたずけてくる。」

サーヴァントを倒してくるとあっけらかんとカズマいう。

「この場をなんとかするのは別にいいけど……ほ、本気、いくらアンタが強くてもサーヴァントとの相性しだいじゃヤバい相手もいるかも知れないのよ！」

「その時は、その時はでなんとかするさ。」

遠坂にこの場を任せて、カズマは踵を返し、非常階段のドアを開け、外に出ようとする。

が……その時、問題が起きる。

廊下のいたるところから訳のわからんヤツらが現れたのだ、しかも

凄い数で。

「遠坂、なんなんだコイツは！」

出てきたヤツらはよくホラー映画やゲームで出てくる、骸骨兵士のような形をしていた。手にしている武器も映画のゲームと同じ、剣や棍棒、盾といった武器だ。

「！コイツは‘竜牙兵’よ。ただの雑魚、アンタなら問題にならないわ、さっさと倒して！」

「了解だ。……トレース・オン。」

すぐさま、鉄甲を投影し遠坂のすぐそばで手にした剣を振りかぶっている竜牙兵に拳を打ち込む。

ガシャーンと音を響かせてあっさりと砕かれる。

「うわっ。コイツらもろ！」

まんまりにも倒した手応えが無いためカズマ自身も驚いている。

「それはアンタだからよ！」

遠坂がつかさずツッコミをいれる。

「でも数がいるな、さっさと倒すか。でないと俺の本命の相手の所にいけないからな。」

左手で持っている釘（？）を引っ張り鎖の相手との距離ながくする、これをもっているサーヴァントに急に引っ張られても大丈夫なよう

に。

「ていうかコイツらアンタの所のキャスターの仕業じゃないの？増援じゃないの？」

「味方なハズないじゃん、だって家のキャスターこんなこと出来ないし。だいたいもし味方なら俺が破壊するはずないだろ。」

「た、たしかにそうね。」

喋っている間にも竜牙兵は次々に襲いかかってくる。

「邪魔だ！！」

が襲いかかってくる竜牙兵は全てカズマの右拳と投影によって鉄製のブーツを装備した両足に打ち砕かれていく。

ガシャーンガシャーンと無人の学校の廊下に竜牙兵の砕かれる音が響く。

「……コイツは一体何体いるんだ倒しても倒してもきりがないぞ。」

カズマはすでに２００体以上倒している。だか竜牙兵は後から後から次々に現れ一向に減る気配がない。

「こうなったら、直接この兵を召喚しているサーヴァントを倒しに

行くか？……いやダメだ。俺がこの場から離れれば俺の後ろにいる遠坂と名の知れぬ女子生徒が無残に殺されてしまう。」

遠坂1人なら逃げることは可能だろうが、今は意識のない女子生徒が1人いる、遠坂の実力では逃げることは困難だろう。

「さてどうしたものか。」

遠坂のサーヴァントのあの赤い外套をきた男がいれば遠坂と女子生徒を守ってもらうなり、逃がしてもらうなりしてくれれば、カズマはこの場を離れ遠坂を狙ったヤツを倒しにいけるのだが。

「聖都くん。なんとかならないの！」

カズマの後ろから遠坂が呼びかけてくる。

「なんともならん。そっちこそなんともならんか？2人が逃げるなりなんともしてくれれば俺は討って出れるのだが。」

会話しながらもカズマの片腕と両足は高速で動き続けて、自分達3人に襲いかかってくる竜牙兵を砕き続ける。だが、カズマが遠坂を狙ったサーヴァントを倒そうと狙っている限り手詰まりだった。

しかしそこに。

「マスター！ご無事ですか！」

タマモがすぐそばの窓ガラスをぶち破って現れたて状況が変わる。

タマモはカズマの周りの状況をすぐに判断し、胸元から呪符を取り

出す。

「マスターに何してるんですか！！下がりなさい、この不恰好な骨。」

タマモが呪符を放つ。

放たれた呪符は凄まじいほどの暴風に変化し、カズマの周りはおろか、見える範囲にいる竜牙兵を一体残らず全て粉砕した。

背を盾がわりにしてカズマは遠坂と女子生徒を風から守った。

「キャスター。もっと周りを見て使う術を決めてくれ。」

「すみません。マスター、少し耳にきたものですから。」

「いいじゃない。おかげで竜牙兵は全滅できたみたいだし、結果オーライよ。」

窓ガラスが全て粉砕されているが……その辺の事はあの教会の神父に連絡しておけばなんとかするだろうし…確かに、まぁいいか。

「タマモ、２人を任せていいか？」

タマモと向き合って提案する。

「マスターのお願いならどんなことでも了解ですよ～。ではマスタ

ーは、どうするんですか？」

「これ、見てくれ。」

「？？なんですかこれは。」

いままで持っていた釘と鎖がくっついている武器をタマモに見せる。

「さっき、非常階段のドアの方から飛んで来たんだ。多分、サーヴァントの武装だろうから、これをたどってちょっとぶっ殺してくる。」

非常階段のドアを開け飛び出そうとするカズマの背中にタマモはぴったりと体をくっつけるけ囁く。

「マスター、ご自愛ください。貴方が傷つくのはタマモにとってなによるもつらく、悲しいことなのですから。」

「すまんな、タマモ。いつも心配かけて。」

カズマとタマモは互いにさか聞こえはいようにしながら言う。

2人は体を離す。

カズマは階段を凄い勢いで下りていく。途中踊り場にたどり着いたら手摺りの向こう側にジャンプし一気に降り、うまく着地、着地と

同時に走り出し、すぐに見えなくなる。

キャスターはカズマが見えなくなるまで見守っていた。

……

弓道場裏の林、そこに鎖は続いていた。

「不意討ちの上にこんな武器、相手はアサシンと考えるのが無難かな。まっ、決めつけは良くないけどな。」

カズマはゆっくりと薄暗い林の中へ歩いていく。

歩きながら周りを見渡す、誰かに見られている。間違いなく何者かが近くにいる。

「出てこい！居るのはわかっている。」

「……」

木々がカズマの声でざわめくだけで……応答はない。

「仕方ないな。」

手に持っていた釘を、おもいっっっきり強く引っ張る。

「っっ！！」

木々の間から微かな声と気配を感じとる。

「そこか！」

すぐさま、何十もの鉄剣を投影し感じとった方へ投擲する。

轟音を発てて木が倒れていく。

倒れていく際の土煙と音に紛れもう一本の釘が空気を裂いて飛んでくる……が。

「あまい。」

もう一本も持っていない方の手で難なく掴み取る。

「遅いぜ。こんな攻撃じゃ、俺は殺れんぞ。」

釘のような武器を地面に捨てる。

「なるほど、ただの人間ではないようですね。」

土煙がはれる。はれた所に立っていたのは紫色の長い髪、高い背、

両目を眼帯で隠し、なおかつ着ている服は肩だし、スカートは短く、これ少し大きく動いたら中見えちゃうじゃねぇの？……ぐらい短い。一見は多少背の高め露出の激しい女性に見える。

だがカズマは蜘蛛のようなヤツだなというのが第一印象だった。

「あんた……サーヴァントだな。」

「ええ、そうです。それがなにか？」

カズマは全身の筋力に力を込め、すぐにでも飛びかかれるように体の準備をしながら目の前のサーヴァントに質問する。

「この学校に結界を敷いたのはアンタか？」

「ええ。マスターの命令で私が張りました。」

目の前のランク不明のサーヴァントがその言葉発した瞬間にカズマは地面を砕くほどの踏み込みで肉薄する。

「この場で貴様を消す！」

その言葉には明確な殺意が、その瞳には怒気がこもっている。

その拳と脚には投影で作り上げた、鋼鉄の手甲とブーツが装着されている。

「人間風情があまり調子にのらないことですね。」

サーヴァントは釘のように武器を構える。

「人間をなめんな！この蜘蛛女。」

閃光のようなカズマの右ストレートがサーヴァントの顔面に突き刺さる。

「がっ。」

まともにくらい女のサーヴァントがうめき声をあげながら仰け反る。

「せい！」

流れるよいな動きで左足踵で相手のわき腹に、蹴りをぶちこむ。

「がはっ！

面白いように敵サーヴァントの体がすっ飛んでいく。

「まだだぜ。」

カズマはふっ飛んでいくサーヴァントに追いつき追い討ちを仕掛けようとしたら、地面から何本もの生えてきて追い討ちを防がれる。

「ちっ。こざかしいんだよ！」

「なっ！」

迫る釘の武器を片手で全て打ち払い、再び敵サーヴァントに迫る。
驚愕の声をあげる敵サーヴァントを無視する。
「言ったろうが、そんな攻撃じゃ俺は殺れと。」
追撃をしようとしたが、敵サーヴァントの体勢を整えるぐらいの時間稼ぎにはなったらしく、カズマは一体足を止めた。
「……貴方は本当に人間ですか？」
敵サーヴァントはさっきの踵蹴りであばら骨が折れたのか脇を手で抑えている。
「人間だよ。当たり前じゃねーか。」
一応相手の問いには答えておく。人外だと思われては心外だからな。
「そろそろ消え失せろ。抵抗しなければ死んだという事にきずかせないくらい楽に殺してやる。」
カズマを殺すのは無理だと理解したのか、敵のサーヴァントはジリジリと後退り始める。
「……抵抗すると…どうなるのですか？」
「地獄のような苦痛を味あって死ぬ事になる。」
鉄甲の填まった両手をガキィィンと火花散るほど強く打ち付けて、

敵サーヴァントに警告する。
「どちらにしても殺されるのには変わりはないのですね。」
「サーヴァントは最後まで勝ち残らない限り、どうせ全て消えるんだ。早いか遅いかの違いだろ。」
「確かにその通りです。……ですが、人間ごときに殺られる訳にはいきません！」
瞬間、敵サーヴァントが木々のバウンドを使い空高く跳躍する。
「逃げる気か？逃がしない無駄な足掻きだ。」
カズマも敵のサーヴァントとを追うために同じように木々を使い跳躍する。
「かかりましたね。」
敵のサーヴァントがニヤリといやらしく笑う。
「なっ！！」
敵のサーヴァントと同じ高度まで到達するとカズマの上下から凄まじい勢いで何本もの釘が接近してきたのである。
「空中でな回避のしようがないでしょう。死になさい！」
正確にカズマの心臓や脳等を狙ってなはたれた攻撃だった。

「……なんだ、宝具を使う訳じゃないのか。」

狙われながわらもカズマはガッカリしていた。

「これで三回目だな。言ったっろ。」

普通だったら絶対に回避しようのない空中にいながらも何ら冷静さを失うことなく自分の急所めがけて飛んでくる釘を眺めながら改めて断言する。

「こんなモノじゃ、俺は殺れないんだよ!」

急所めがけて飛んでくる釘を歯で、手で、脚で打ち落とし、全てを防ぎきる。

「は?」

驚くサーヴァント。その度しがたい隙を見逃すほどお人好しではなく、剣を大量に投影し投擲する。

「っっ!」

投擲した剣は当たる前に正気を取り戻したサーヴァントの鎖に多少打ち落とされたが何本かは相手サーヴァントの手足に突き刺さり、さらに木に縫い付けにする。

「終わりだな。何のクラスだが知らないがこうなたらもうどうしょうもないだろ?」

「ぐっっ！つうっ。」

なんとかして剣を抜こうとしているが両手には何本の剣が腕と一緒に木にも突き刺さっているのだ。両手が使えない状態ではそんな簡単になんとかできるはずもない。

ちなみに片方だけだか足にも剣が木ごと、深々と突き刺さり動きを封じている。

「苦しいだろうからすぐに首を切り落として、その苦しみ解放してやる。」

すぐそばまでの木に着地したカズマの手にははいつもの両刃の西洋剣を投影され、握られいた。

狙いを定めるなのようにトントンと何度も首に剣を軽く押し当てる。

「じゃあな。」

首へうち下ろされる断罪のごとき一刀。このクラスすら不明のサーヴァントはここで消滅されるはずだった……タマモとは別に本来の聖杯戦争の聖杯で召喚された、キャスターという第三者の介入がなければ。

剣が蜘蛛女のサーヴァントの首に到達するほんの1センチぐらいで停止、すぐさまカズマは後方へバックステップした。

カズマがバックステップした数秒後、カズマがさっきまでいた空間に爆発が起きた。

「これは……魔術による攻撃。でも家のキャスターによるものじゃない。と、なると。」

地面に着地し空中を見据える。

上空には頭から脚の爪先まで紫色で統一したローブを纏った女性が浮いていた。間違いなくキャスターのサーヴァントだった。

「俺の対魔力B、あの程度の魔術行使で傷つくはずないんだが……咄嗟に避けちまったな。」

自分の危険察知能力が裏目にでたな。ボリボリと頭をかく。

上空のキャスターにも気を張りながらも、剣で木に縫いつけた蜘蛛女の方がどうなたかを確認する。

そこには木に剣が突き刺さっているだけだった。

「居なくなっている。……ちっ、さっきの攻撃が当たるギリギリで霊体化して逃げやがったか！」

吐き捨てるよいに呟いた後にローブを纏ったキャスターのほうに意識を集中する。

「仕方がない。今のヤツを逃がした落とし前はコイツに払って貰うとしよう。」

標的を切り替えて、今度は上空に浮かぶキャスターと向き合う。

「……クラスはキャスターだな。」

「……ええ。」

「なぜさっきのサーヴァントを助けた？お前らひょっとして組んでいるのか。」

「ふふふっ。そんなことあるわけないでしょう。マスターとサーヴァント、同時２人に殺れそうだったからしかけただけよ。」

キャスターは冷笑を浮かべながら話す。

「そうか。なら貴様を追い詰めてもさっきのヤツは助けには来ないんだな。……なら。」

「なにかしら？」

「さっきのヤツの替わりに貴様が消えろ。キャスター！」

上空に居るキャスターに向かって跳躍する。

「私はさっきまでの貴方の戦いを見ていたの。とてもじゃないけど私じゃ貴方にはかなわない。……だから。」

キャスターの姿が徐々に小さくなっていく。

「逃げるか！キャスターお前はサーヴァントだろ。人間相手に撤退するとか恥ずかしくないのか！」

挑発してキャスターの逃亡を防ぐ為に大きな声で叫ぶ。

「……確かに恥よ。でもね聖杯を手にいれずに死ぬよりはマシだわ。私、まだ死にたくないもの。」

キャスターの姿がどんどん小さくなっていく。

「くっ。逃がすか！」

挑発に乗らなかったキャスターを逃がすまいと、すでにキャスターに肉薄していたカズマは手に持っていた剣を振りかぶり、一気に降り下ろす。

が剣にキャスターを斬った手応えは伝わってこず、空を斬っただけだった。キャスターの方が速く逃げたのだった。

ドンという音と共に地面に着地する。

「あ～～っ。くそ、サーヴァント2体と遭遇して1体も仕止められなかったなんて、なにやっているんだ俺は！」

ここで学校に結界を張っている、ランク不明のサーヴァントと町でガスの流失を装って人々から魔力を集めているキャスターのサーヴァントこの2体は真っ先に倒そうと決めていたのに。

乱暴に髪をかきながら愚痴るカズマ。そこにタマモがやってきた。

「マスター、ご無事ですか。」

「タマモ、大丈夫だよ。それより、すまん。サーヴァント2体を取り逃がした。」

タマモはニッコリと微笑みながら答える。

「いえいえ。それはマスター、謝ることではありませんからお気になさらず～。私はマスターがご無事なことが一番嬉しいのですから～」

キャスターが本当に嬉しいそうに笑ってくれているのでカズマはホッと胸を撫で下ろす。

「それでこれからどうしますかマスター？」

「多少時間が遅くなってしまったが、学校の中にある結界の基点を潰して回るとしよう。」

「わかりました。さあ、早速行きましょう、マスター。」

タマモがカズマの腕に自分の腕を絡めて一番近い基点に向かおうとする。

すると自然とカズマの腕にタマモの体の中でもっとも柔らかくて気持ちのいいであろう、２つの双丘が当たる……というかタマモはスタイルがとても良いので挟まれると言うのが正しいのだが。

「た、タマモ、腕にその、なんというかな。あ～～その、当たっているんだけど。」

顔を赤くしながら、それでもってタマモの方から目をそらしながらカズマは注意するが。

「くすっ。マスター、わざと当ててるんですよ。」

といい、さらに体を密着させて押しつけてくる。
カズマは顔をこれ以上ないくらい真っ赤にさせながらタマモと腕を組ながら基点を潰しに歩いていく。

タマモはカズマと一緒に基点を消している間常に腕を組続け、全ての基点を学校から消し家に帰る間も組続けていたのでその間は物凄くご機嫌だった。

カズマは腕に当たる感触にドキドキし過ぎて落ち着かなかったが。

そう言えばっと、カズマは帰る途中に気になっていたを聴いてみることに。

「タマモ、２人はどうした？」

「あのツインテールなら学校を出てすぐにあの女が召喚したサーヴァントが来て２人を保護してくれましたよ。」

「そっか。」

安心して歩くペースを少しだけおそくなる。

しばらく歩き自宅に到着する。

横開きの家の玄関をガラガラと開けるとセイバーが。

「お帰りなさい、2人とも。」

と出迎えてくれた。

家に帰るとすっかり日がくれており、2人は急いで晩御飯の準備をすることにした。

晩御飯が終わり、一服している時にカズマはセイバーに今日、学校の放課後にあった出来事を話した。

学校での死闘（後書き）

次の話はライダーの宝具解放と逃走ぐらいまで行くと思います。

魔眼と宝具（前書き）

この辺までは原作と似たような流れです。

相変わらずの才能のない駄文ですが、最後までよろしくお願いいたします。

魔眼と宝具

……夢を……見ていた。

1人の少女が一国の王となり国を救うために岩に突き刺さった剣を抜き、1人の人ではなく王となる。

そんな夢。

少女は王となり数々の戦いを勝ち抜くが……最後には鞘をなくし、たった一人の家臣に見守られて息を引き取る。

カズマには少女の生涯生きざまと、少女が手にしている剣が印象深く刻まれた。

……

カズマは目を覚ます。

「今の……夢は、セイバーの……か…こか。」

息苦しいことに今さら気ずく。

そして、目を開けたのにも関わらず、何も見えない。いや、正確には肌色以外は何も見えない。

「???…なん……だ、これは……。」

首は何かに、がっちりと固定されていて動かない、動こうとするとさらに力を強めてくる。

両腕、肩から下、腕と手は普通に動く。

足は何かに絡めとられているのか動き難くなっている。

（まさか！敵のサーヴァントの攻撃か。……まさかな、そんなわけないか。もしそうだったら今頃、俺の命はないだろうし。）

だいたいカズマに全く気配や攻撃意志を感じさせずにここまで近ずけるサーヴァントはいないだろう。

目の前にあるモノは、息苦しいが、いい匂いがして、落ち着く気分なれて、それでもってとてつもなく気持ちのいいものである。それが今自分の目の前ある。

「な、なんだ。この物体は？」

不思議がりながら、まず自分の顔に密着しているモノをかろうじて自由な両手を使い確めてみることに。

まず、軽くつついてみる。ポヨンといった押してもすぐ押し戻してくる弾力があった。

あえてこの弾力をたとえるなら、そう今にも崩れそうな大きめのプリンだ…！

……とにかく物凄く柔らかい物体ということが再確認できた。

次は、どうしょうか考えていると頭の上から聞き慣れた声が聞こえた。

「お目覚めですか？マスター。」

声が聞こえた方にギギギッと油の切れたロボットのように顔を、瞳を向ける。

「……キャスター……」

「はい。おはようございます、マスター。」

タマモはヒマワリのような笑顔で挨拶する。

彼女の格好はいつもと同じ白い薄手の着物のような肌着だ。ちなみにタマモは寝るときは、下着の類いは着けていたい。にもかかわらず彼女は寝るとき着崩れを直そうともしない。胸元がかなりずれていてかなり危うかった。カズマには、見えはしないが多分脚の方もかなり危うい感じだろう。

……カズマはここまできて、ただ今の自分の状況が判った。要するに今自分はタマモに抱きかかえらるれような格好で寝ており、そして何かのひょうしで彼女の胸に顔を埋めてしまったのだ。

じゃあ今さっき自分が触れたのは彼女のその豊満な胸であったわけで……。

「！？？？？？？？？！！」

「ど、どうかしましたか、マスター！」

声にならない悲鳴をあげる自分のマスターを心配してさらに身を寄せる。

するとかろうじて隠れていた、タマモの豊かな胸の先端のさくらんぼが見えそうになりカズマは。

「っっ！！！」

光の早さでタマモの拘束を引き剥がし、背を向ける。

（危なかった。タマモは、俺に無防備なところがあるからな。）

「あの…？マスター、どうかなされましたか。」

「い、いや。…別に、なんでもない……よ。」

「はぁ、そうですが。」

「それより、服が着崩れをおこしているぞ。」

そっぽを向きながらタマモに注意する。

「……もう、マスターは意気地がないんですから。」

タマモはカズマに聴こえない小さな音量で呟きながらプクッと頬を膨らませる。

タマモが着崩れた着物を直そうとしようとする直前に勢いよく、隣の部屋との境である襖が開けれた。

「カズマ！敵襲ですが」

スバンと音をたてて開けられる襖。

「あっ。」

「あら。」

セイバーのご登場だった。

「カズマ、さっきの声は一体どう……し。」

タマモとカズマの姿を見てセイバーの言葉が小さくなっていく。それに比例するかのごとく顔が赤くなっていき、表情が険しくなっていく。

「ま、まてセイバー、これは別に特別深い意味は……。」

カズマが慌てながらもなんとか穏便にこの場を納めようとしようとしたが……次のタマモのセリフがそれを妨害した。

「なんですかセイバー？私とマスターの朝の情事を邪魔しないでくれませんか。」

この一言で全て台無しだ。

「キャスター。」

タマモに詰め寄るカズマ、タマモは自分は何か悪い事を言ったのかな？といったキョトンとした表情でカズマを見ていた。

「カズマ、ご説明お願い出来ますか？」

ユラリと体を揺らしセイバーは室内に入ってくる。表情は笑っているが目はまるで笑っていない、すんごく怖い。

「まて。まて。まて。セイバー、落ち着け！」

「私は十二分に落ち着いていますよ。カズマ。」

怖いセイバーに更にタマモが。

「これだからお子様騎士様は嫌なんですよ～～。愛のある行為を不

純だとか不潔な事だと思っているから～～。」

「ちょっ！キャスター。」

タマモの言葉でセイバーの堪忍袋のおが切れたようだ、だってブチンていう音が聞こえたもの。

「いいだろう、キャスター。どうやら駄狐の貴様には少しばかり調教が必要のようだな。」

瞬時に武装を纏うセイバー。不可視の剣を構える。

「私、脳筋の相手は得意なんですよ～。」

タマモもすぐさま立ち上がり武装し自身の武器である鏡を宙に浮かして臨戦態勢にはいる。

「止めろ、二人とも！」

カズマは止めるように言うが……。

「いくぞ！駄狐！！」

「負けませんよ、お子様騎士様！サクッと黒コゲにしちゃいますね！」

二人は威勢よくセリフを言い合うと庭に飛び出して行った。

プチ聖杯戦争の開幕だった。

……

３０分後なんとかカズマが２人を仲裁し戦闘を止めるのに成功した
……朝から物凄く疲れた。

仲間同士で殺り合って本当にどちらかが死んだりしたら笑い事にならない。

そして、ランク不明のサーヴァントとキャスターと遭遇した次の日。

聖都家ダイニングにて。

カズマが２人に昨日の今日なので、さすがに学校についてきてもらうために朝食後に伝えることにした。

「キャスター、セイバー、今日は学校について来てくれ。正確には学校近くの喫茶店かどこかで待機していてくれ。」

「了解です。マスター。」

「カズマ、ようやくその気になったのですね。ええ、わかりました。」

「じゃあ、俺は学校にいく。」

「いってらっしゃいませ、マスター。」

「我々も準備ができしだい向かいます。」

カズマが玄関の戸を開け学校に向かうのをセイバーとタマモが送り出す。

……

カズマが玄関を出て学校へ向かって歩き出す。

セイバーとタマモもカズマが学校へ行くのを見送った後、少し時間が経過し自分達も学校近くの都合の良い場所に移動することにした。準備している途中でセイバーは疑問に思っていた事をタマモに聴いてみることにした。

「キャスター、なぜ学校に結界を張っているサーヴァントと町に結界を張っているサーヴァントが別人だと気ずいたんだ?」

「簡単ですよ。マスターの学校に張ってある結界と町に張ってある結界とではまるで術式が違いましたから。」

タマモは当然のごとくサラッと答えた。

……

あっという間に午前中の授業が終わり、現在は昼休み。

「遠坂は今日は休みか、なんかあったのかね。」

今日、学校へ来て朝そう連絡が教師からあった。体調不良らしいが……本当のとこはどうなんだろうね。

昼食を食べ終えて机に頬杖をつき、ぼんやりと空を眺めていた。

異変は次の瞬時に起きた。

周囲に妙な魔力を感じたと思ったら、周りにいたクラスメート達がバタバタと倒れていく。

「なんだ?体に軽い倦怠感。……まさか、どっかのアホが張っていた結界が……」

カズマは窓の外を改めて見る。血の牢獄のような外観の結界が学校

の周囲を覆うように張られいた。

「…発動してやがる。確かキャスターに聴いてみたらこの結界って、中にいる人間をドロドロに溶かして吸収するっていうかなりたちの悪いシロモノのはず。さっさと張ったヤツを殺すなり基点をつぶさないと俺はともかく周りの連中がヤバいか。」

意識を集中し結界の一番デカイ基点と敵のサーヴァントも探す。

「見つけた。……しかし見事に反対側にあるな。サーヴァントは屋上、基点は昨日行った弓道場の裏の林の辺りか。さてどっちに向かうか？」

考える時間はあまりない、遠坂がいればすぐに動けたのだが。

たが、考える必要はすぐになくなった。

「マスター。ご無事ですが。」

「カズマ！無事か。」

セイバーとタマモが窓ガラスをぶち破ってカズマの来たからである。

3人が集まる。作戦会議だ。

「セイバー、キャスターよく来てくれた。」

「当然です。マスター。」

「カズマ、それでこれからどうするのですか？」

セイバーとタマモにサーヴァントは屋上にいることとこの結界の発動基点は別の場所にあることを伝える。

「カズマ、私と貴方で屋上へ行きサーヴァントをほふりましょう。貴方と私の戦闘力を鑑みればそれが一番確実です。キャスターには万が一の保険として基点を潰しに行かせるのが良いかと。」

セイバーが作戦を立案する。

「ぶぅーー。悔しいですけどその作戦が一番無難なのは間違いないですね。」

タマモも渋渋だか認める。

「よし、じゃあその作戦で行くとしよう！」

3人が頷く。

「いくぞ！散開！！」

カズマとセイバーは屋上へ、タマモは弓道場の裏の林へ移動を開始する。

倒れている人達を避けながら3人は目的地へ爆走する。

屋上のドアを蹴破るつもりで開ける。

カズマとセイバーは走って来た勢いを落とすことなく屋上へ到着する。

「なんだ、お前。」

「やはり、きましたか。」

屋上に居たのは海藻のワカメの髪型をした男子生徒と昨日あった蜘蛛のような雰囲気を持ったサーヴァントだ。

お互いに相手を睨み付ける。

「お前は……確か……間桐慎二か。」

この学校では結構な有名人だ。女性徒には人気は高いらしいが男子生徒にはかなり嫌われているな、いい噂は聞かないからな。

「はぁ、なんで見ず知らずのお前が僕の名前知ってるわけ。気持ち悪いんだよ。」

ワカメの言葉は軽くスルーする。

「おい、そこのワカメ！そいつはお前のサーヴァントだな。さっさとこの結界を解除するように命令しやがれ。」

カズマは命令口調で怒鳴ると、ワカメの顔が醜く歪む。

「誰がとくか。せっかく発動させた結界だぞ。うるさいヤツだ、ライダー殺れ！」

ライダーと呼ばれたサーヴァントは臨戦態勢をとる。

「なら力ずくで解除させてやるさ。セイバー、いくぞ。」

カズマは日本刀を投影し、正眼に構える。

「わかりました、カズマ。」

「斬り伏せるぞ、セイバー。」

カズマとセイバーは真っ直ぐにライダーとワカメに突っ込んでいく。

突っ込みつつカズマはセイバーにいう。

「セイバーはライダーを殺れ、俺はあのマスターであるワカメを殺る。」

「わかりました。カズマ気をつけて。」

「わかってるって。マスターだからって油断はしない。」

「やるのか、お前。じゃあ死ねよ。」

ワカメは手に持っていた革製の本を拡げる。

カズマは足を止め様子を見る。

「あの本は……妙な魔力を感じるな、迂闊に近寄らないほうがいいかな。」

ワカメの周囲いに黒い魔力が集まり鞭のような襲いかかってくる。

「あの魔力、ライダーのヤツの力を使っているのか。」

カズマに黒い魔力の鞭が迫る。

カズマはなにもせずにその身で受ける。

バチィと音を発てて黒い鞭はカズマの体に触れることなく霧散する。

「はっ？……な、なんだよ、お前。なんで効かないんだよ。おかしいじゃあないか。な、なんで。」

ふぅ、とため息をついてカズマはワカメに向かってゆっくりと歩き出す。

そうゆっくりと、悠然と。

「ひぃぃ、来るな、くるなーーーー。」

ワカメは怯えながらも、何本も鞭を造りだしカズマにぶつける。

しかし何度やっても結果は変わらず、カズマの体に触れる前に霧散してしまう。

「エセ魔術だな……そんな魔術じゃあ、おれの対魔力は突破できない。」

向こうじゃあセイバーがライダーを圧倒している。この分なら向こうもすぐに決着するだろう。

そして、カズマはワカメの前にたどり着く、手にしていた日本刀を振り上げる。

「ワカメ、これが最終警告だ。結界を解除し、サーヴァントとの契約を破棄しろ。そうすれば命は助けてやる。」

「い、いやだ。なな、何してるんだ、ライダー、マスターの危機だぞ。は、速く助けろよ！」

ワカメがそう叫ぶと同士にカズマの横にセイバーがくる。

「残念ながら……貴様のサーヴァントはこない。」

セイバーの剣にはべったりと血がついていた。

「ひぃ。」

喉の奥からの短い悲鳴をあげるワカメ。

「……無益な。」

振り上げた刀を勢いよく降りおろす。

が、ワカメの肘から下を両断するはずだった刀が途中で腕ごと止まる。

「な、なんだぁ。」

身体中に妙な重圧を感じる。

「これは貴様の仕業か……ライダー！」

セイバーがライダーのいる方を睨む。カズマもライダーのほうを見る。

ライダーは身体中傷だらけで、立っているのもやっとだろう。その証拠にライダーの立っている下の地面は大量の血液が溜まり、血だまりをつくっている。

ライダーの様子を観察する。そこで気ずくライダーは先ほどまで目

を覆っていた眼帯のような目隠しを外していた。
その奥に隠されていたモノは。

「その瞳は魔眼！！しかもこの干渉力は…黄金…いや……宝石級か！？そんな奥の手を隠していたわけか。」

カズマはワカメのからライダーの方に向き刀をむける。

「カズマ…貴方は平気なんですか？」

セイバーは魔眼の干渉力のなかわりと平気そうなカズマに思わず疑問をぶつける。

「俺、対魔力Bだから重圧だけですむんだよ。」

普通に答えるカズマ。

「サーヴァントではないのに平気とは……私のマスターは本当に人間離れした方だ。」

呆れたようにセイバーは笑う。

再びライダーと向き合う。ワカメは放っといても大丈夫なので無視する。

「さて、この程度の縛りで俺達をどうにかできると思ったのか。」

刀を消しいつもの両刃の西洋剣を投影する。

「確かに……その通りですね。この程度の縛りでは貴女方は止められない。そんなことは承知の上。ただこのわずかな時間、貴殿らを足止めできればよかったのです。」

ライダーの体から滴り落ちていた血が動きだし、空中に魔法陣を形成する。

両名の直感が告げる。

「これは……マズい。」

「避けてください！カズマ。」

魔法陣に描かれた目が開く。

2人は咄嗟にその場から飛び退く。

直後。

ドゴォォォォォォォン……する凄まじい轟音が周囲に響きわたった。

轟音を発したモノはそのまま空へと飛行していった。

カズマはライダーがいた場所を確認する。

その場には誰もいなかった。

周りを見渡すと、無様に震えあがっていたワカメの姿もなくなっていた。ライダーの奴が離脱する際に拾っていったのだろう。

「……逃げられたな。」

「途方もない、威力です。」

ライダーが通ったであろう箇所はコンクリートが粉々になっており、威力の高さをものがっている。

そんな時、空から日が差し込んで来た。

「結界は消えたようですね、キャスターのおかげでしょうか?」

「そうかもしれんが……多分、ライダーの奴が逃げたからだと思う。」

少しの間、考える。次はどうすれば良いのかを。

「セイバー、夜になり次第新都に向かうぞ。あのワカメのバカの考えは大体わかるならな。」

言いながら、カズマは屋上から飛び降りる。セイバーもそれに続く。

「というと。」

「あのワカメはまたやる、魂食いを…なりふりかまわない方法でな。ならやる場所は人が多く集まる新都で決まりだよ。」

制服のポケットから携帯を取りだし、ある協会に連絡をする。

「言峰に言って学校のこの事件をなんとかしてもらわないとな……。」

言峰に連絡を入れた後、カズマとセイバーはタマモと合流し、隠れながら家に帰った。

家に帰宅する途中。

「なんで、こんな風にコソコソしながら帰らなければならないんです～。私達なにも悪いことしてませんのに～。」

「キャスター、あまり大きな声をあげるな。隠れている意味がなくなる。」

ぶつぶつと文句をいうタマモにセイバーがたしなめる。

「すまんな、キャスター。でもな、俺だけ無事だったら変な勘繰りされかねかいんだから、勘弁してしてくれ。」

連絡をした際に、言峰から今日は体調不良で昼休みになると同時に家に帰宅したことにしておけと、指示がでたためカズマ達3人は人目を避けながら移動しているのだ。

「教師も含めて、全校生徒が倒れたのに1人だけ無事……確かに揉み消し側からなら無事より、始めからいなかった事にしといた方が楽だわな。」

カズマはぽっりと呟いた。

……

その後、魔術協会の方でこの事件は揉み消す事となり。
学校はしばらくの期間、休校なった。

そして夜となり、ライダーとワカメとの決着つけるためカズマ達3人は新都に向かって歩きはじめた。

魔眼と宝具（後書き）

次でライダーとは決着です。

やはりライダー戦の最後はアレで決まりです。

セイバーの宝具（前書き）

この話でライダーとは決着です。

セイバーの宝具が、炸裂します。

時間などが少しおかしい所もありますが、突っ込みは勘弁してください。

セイバーの宝具

夜になり、カズマ、キャスター、セイバーの3人は新都に向かい歩いていた。目標は新都にいるであろうライダーを新しい結界発動させる前にを消すこと。

3人は横に並んで歩いている。カズマが真ん中で、右はタマモ右側、セイバーは左側だ。

「役割分担を決めよう。その方が咄嗟の時に混乱せずにいられるからな。」

新都に着き、ライダーとワカメが潜伏しているビルを探している途中にカズマが言い出す。

「俺とセイバーでライダーとワカメはなんとかするから、キャスターは周りを警戒していてくれ。」

「えぇ～～。私またお掃除ですか。私とマスターで殺りましょうよ～～。私達2人でもあんなコンビ十分倒せますよ。」

タマモはカズマの右腕にピトッと身をよせ、上目遣いでカズマをみる。

かなり可愛い仕草だ。ドキッときたし、…思わず…じゃあ、やっぱライダーはキャスターと協力して倒すわ…と言うところだった。

「ダメだ。だってさキャスターの宝具とライダー宝具は相性が悪いからな。」

「それは……そうですけど。」

「キャスター。貴方はマスターであるカズマを困らせたいのですか？」

「まさか。そんなわけありませんー。」

セイバーの言葉にあっかんべーしながら返事をするタマモ。

キャスターの返答にセイバーは額に青筋をたてて、形の良い眉をきりきりと上げる。

「ならカズマの命令に従いなさいキャスター。それがサーヴァントとです。」

「ぶぅーー。」

まだタマモには不満はあるようだが、これ以上話ても平行線だとわかったのか、頬を膨らませただけで言葉には出さなかった。

「話もまとまったみたいだから、もう少し探索を上げよう。一言で新都と言っても広い、あのワカメが狙う可能性があるビルを全てに

行き、いるかどうかを確認しなければならなうからな。」

カズマの言葉に2人も頷く。

3人は歩くスピードを速めて探索していく。

……

探索していく途中で公園を見つけ、キャスターの提案で3人は休憩をとることに。

「ここ、本当に公園なんですかね～？ベンチは何脚かありますけど、……遊具は一つも見当たりませんし。」

公園に入った後、タマモが辺りを見渡し見たたんまの感想をあげる。

「だな。この町に住み始めた時に隣に住んでる藤村さんから聴いた話によると、なんでも今から１０年位前にこのへん一帯は大火災に見舞われたらしい。１０年たっても不思議な事に草木一本生えてこないから、この場所はこの状況のまま放置され、でも場所を余らせておくのももったいないから公園にしたらしいぞ。」

カズマが藤村さんから聴いた話をタマモに教える。

「１０年間、草木一本生えてこない場所ですが……その大火災って

本当に自然におきた事象なのか怪しいものですね～～。」

「言われてみれば、確かにな……しかし今はもうそれを確かめる手段はないな。」

キャスターとカズマが今いる公園について話あっている間、セイバーは感慨深そうに公園を見渡していた。

その表情と眼差しが気になりカズマはセイバーに話かけた。

「？セイバー、どうかしたか。」

「……2人には話しておいた方がいいでしょうね。」

セイバーは神妙な顔つきでカズマとタマモに向き直り語りだした。

「ここは…10年前に起きた聖杯戦争の最後に雌雄を決死た場所なのです。」

カズマとタマモの表情が驚愕に染まるが、二人ともすぐにいつもの表情に戻った。

「……なるほどね。そんな事情を知ってるということは……セイバー、お前はもしかしなくても前回の聖杯戦争にも参加していたんだな。」

コクンとセイバーは頷きカズマの言葉を肯定する。

「それで、貴方は勝ったんですか～。」

タマモは決着の行方が気になるのか、せっかちに尋ねる。

タマモの言葉にセイバーの表情が固く苦々しいものへと変わる。

「いえ、私は勝てませんでした。」

「勝てなかったか……。俺には正直思い浮かばないな、セイバーはかなり強い。そのセイバーにも倒せなかった相手。」

カズマは腕組みしながら目を瞑り考える。

「勝てませんでしたか……でもそれって、逆をいえば負けてないって事ですよね。私が知りたいのは最後にどちらが勝ったってことなんですけど。」

タマモは不思議そうな顔でセイバーに質問しの返答を待つ。

「１０年前の聖杯戦争に勝者はいません。私が宝具で出現した聖杯を砕き４回目の聖杯戦争は幕を締めました。」

「聖杯をてにいれた者がいないってことは……いわゆる全サーヴァント全滅で終わったのか。」

「そんなこともあるんですね～。」

カズマとタマモは初めて知ったといったと驚いている。

「……んっ？あのさ、セイバー聖杯は出現したんだよな。」

となると疑問点が１つ思い浮かんだ。

「はい、それは間違いないなく。」

「なら中身はどうなたったんだ？聖杯はセイバーが破壊したんだよな。なら聖杯の中にあった‐何かが‐こぼれだしたハズだ。それは一体何処に。」

カズマの質問にセイバーは頭を横にふった。

「判りません。ですが…おそらく聖杯の中にあった‐何かが‐この辺り一帯の大火災の原因になったのではないかと。」

話を聴いていたタマモが狐耳をぴくぴく動かしながら。

「まぁ、それが妥当な推理ですかね。」

セイバーの推理に同意する。

「聖杯からこぼれだしたものが、この惨状を作り出したとすれば…その聖杯は俺達が求めているものなのかな。」

カズマはセイバーの昔話を聴いてそう感じていた。

セイバーの昔話を聴いて休憩を終了し、３人は公園を後にし、再びライダーとワカメを発見するため探索を開始した。

「見つかりませんね～～。結界を張るなり、発動してくれればすぐに居場所がわかるんですけど～。」

タマモがそうぼやきながらあるビルの下を３人が通りすぎようとしたとき。

「いや、キャスター。どうやら向こうから来てくれたみたいだぞ。」

「はい？」

言ってすぐにカズマはキャスターを抱き抱え、その場から横に跳躍する。

「セイバー！」

「了解です！」

瞬間、隣に建っていたビルの真上からライダーが高速で落下攻撃をしたけてきた。

ズッドォォン。と凄まじい音を発ててコンクリートが小型のクレーターのように陥没する。

「不意討ちとは……。」

相手の攻撃を受ける直前は瞬時に武装した、セイバーが呻くように言う。

すぐさまライダーの釘のようなダガーを弾く。

「セイバー！打ち合わせ道理にいくぞ！」

カズマはそうセイバーにいい。ライダーが落下してきたであろうビルの壁を垂直の壁走りで登って行く。その前にタマモを地面に下ろす。

「キャスターも打ち合わせ道理に頼む。この周囲に人払いの結界でも張って、関係のない人々がまきこまれないようにしてくれ。それが終わったら、他のサーヴァントがこないか警戒していてくれ。」

「もし、サーヴァントが来たらどうしますか？マスター。」

「防戦に徹しろ。勝つことなんか考えるな、少しでも時間を稼ぐことを優先しろ。ヤバくなったり、バーサーカーが来たらすぐさま離脱しろ。」

そう言い残して、カズマは高いビルの屋上へライダーに負けない程の高速壁走りで走って行く。

「……さっ。私は私の仕事をしましょう。」

キャスターも人払いの結界を張るため移動を始めた。

セイバーとライダーはビルの側面を垂直に跳躍しながら戦い合っていた。

ガキィィン。ガキィィン。ガキィィン。ガキィィン。ガキィィン。

とセイバーとライダーが不可視の剣と無骨なダガーが打ち合う度にカン高い火花を散らす。

が、どうやらセイバーの方が押されていた。さすがのセイバーも足場が悪く、それに魔眼の力もあり、上手く全力で打ち込めないようだ。

魔眼を開放したライダーはカズマの印象道理、蜘蛛のような動きでセイバーをあしらってる。

しかし、それも長くは続かない、自力の差が明確に出始めたのだ。

「ここまでついてこられるとは……さすがはセイバー。最優のサーヴァントと謳われるだけあってやりますね。……ですがどうやら壁登りは苦手なようですね、セイバー。」

「なめるな！ライダー。」

その間にも投擲してくるライダーのダガーをセイバーは弾いている。

気合いと共魔力をさらに纏いに一気に接近して、先ほど打ち合って

いた時より速度をあげ不可視剣でライダーに斬りかかる。

「ぐっ！！」

ライダーは、防ぎはするが勢いが止まらずビルのガラスを突き破り室内の端まで滑っていき床と壁に背中から叩きつけられる。

叩きつけられながらもすぐさま立ち上がり体勢を立て直す。

「やはりこのままでは勝てませんか。仕方ありません。」

セイバーがライダーぶち抜いた窓から室内に入って来る。

「終わりだ！ライダー。」

ライダーに不可視剣を突きつける。

ちなみに、セイバーとライダーの位置関係は部屋の端と端だ。距離にして十二、三メートルぐらいである。

「終わりのは……どちらでしょうね。」

次のライダーは行動は、自分の持つダガーで自らの首を貫く、自傷行為だった。

ドパァっと大量の血を首と口から吐き出すライダーの姿に、一瞬怯むセイバー。その一瞬がいけなかった。

吐き出した、血液が流れるような動きで空中に魔法陣を形成する。

それは今日の昼に学校の屋上で見たものと同じだった。

「しまった！」

セイバーが叫んだ時にはすでに時遅し、魔法陣の目は開いていた。

ドオォォーーーーーーーーーン。

耳を塞ぎたくなるような轟音が室内か響きわたり、そしてライダーの出したモノが部屋の全てを蹂躙していく。

……

カズマはライダーと戦っている側面とは違う壁から屋上へと走り、何事なく屋上にたどり着いていた。

屋上にはワカメが1人立たずでいるだけで他には誰もいなかった。

「ワカメ。」

「お前、やっぱり来たのかよ。」

2人は瞳を逸らさずに対峙する。

ワカメの目は敵愾心で染まっていた。もう話し合いの余地はないと言うことがわかる。

「「さぁ、決着をつけようぜ！」」

ワカメは革製の本を背中から取りだし構える。

カズマも日本刀を投影し大上段で構える。

（ワカメ相手に防御を考える必要はない。一降りで奴の本を持っている方の腕の肘から下を切り飛ばし終わらせる。）

カズマはジリジリと距離を測る。

距離を測り終えたカズマがコンクリートの床を踏み砕くほどの踏み込みで一足でワカメに肉薄する。

ワカメはカズマが急接近したのに気ずけないでいる。

カズマは手にしていた日本刀を一気に降りおろす。ワカメの腕に向かって。何事もなければこの勝負はこの一太刀でついていただろう。

そう、何事もなければ。

カズマの日本刀がワカメの腕を切り裂く直前で、下から凄まじい轟音が響いてきたと同時に、嫌な気配と重圧を感じとり、すぐさま、離れる。

すると、一瞬前までカズマがいた場所が下から上がって何かに粉々に砕かれた。

「な、なんだ！」

上がってきた！何か！はかなり発光しており、カズマは眼を細めてどんなモノか確認を試みる。

「あ、あれは。」

カズマは愕然と声をあげる。

ライダーが呼び出したものそれは……。

「カズマ！無事ですか。」

セイバーがライダーの上がってきた穴から飛び上がってきた。

「セイバー、お前も無事でなによりだ。」

2人はビルの屋上の上で、並び立ち上空を見上げる。

「セイバー……あれって、まさか。」

「間違いないでしょうね。あれがライダーの宝具の正体です！」

2人の視線先にはある動物がいる。動物と言ってもただの動物ではない。

「！ペガサス！」

カズマとセイバーの頭上の空に悠々と駆けているのはまさしくペガサスと呼ばれる、幻獣だった。

真っ白な毛並みに立派なたてがみ、大きくがっしり体躯、澄んだ瞳、きわめみつに背中から生えている一対の大きな翼。

昔話などで、よく語られいるペガサスをそのままこの場持ってきたように姿だった。

「ヤバくないか……セイバー？」

カズマはペガサスの背に乗るライダーから眼を離さずにセイバーに話しかける。

「確かに、しかしまだ勝算はあります！！」

「それも…そうだな。あのぐらいならまだ勝算はあるな。」

カズマとセイバーの闘志は折れることなく、上空にいるライダーを鋭く睨む。

「さて、この子を出したことですし、すぐに終わらせましょう。」

上空から勢いよくペガサスがカズマ達に突撃をしかけてくる。

「上等だ！場外バックスクリーンホームランにしてやるよ！」

凄まじい勢いで下降してくるライダーに向かってカズマはまるで手に持つ両刃の西洋剣をバッターのバットのように構えて待つ。

「カズマ！何をバカなことをしてますか！！」

セイバーはカズマの肩を掴み共にペガサスの突貫車線上から飛び退き、間一髪で回避する。

カズマとセイバーは回避後、すぐさま体勢を立て直す。

「何をする、セイバー！」

「カズマ！貴方はバカですか！あの様な強力な宝具相手に無策で立ち向かおうだなんて。」

めっちゃ起こられた。

アウトボクサーのように突撃と離脱をワンモーションでやられるため、なかなか反撃の目処が立たず回避に専念する2人。このままでは、はっきり言ってじり貧だった。

「このままじゃあ、じり貧だ。何処かで勝負にでないと……。」

「その意見には同感です。ですが、いつ仕掛けるかが問題になります。」

「……ライダーが最大級の一撃を仕掛けくる時しかないな。最大の一撃を撃つ際が一番隙ができるだろうしな。」

「ライダーの最大級の一撃……それを回避した上でこちらの攻撃は確実に相手を仕留めきる。通常の攻撃では難しくですね。」

カズマとセイバーが現状を打破する作戦を話している最中にもライダーの乗るペガサスは2人に絶え間なく攻撃を加えてくる。すでにビルの屋上の床はボロボロで、いつカズマ達が回避した際の衝撃に耐えられずに床をふみぬいてもおかしくない。

絶え間なくカズマとセイバーを攻め続けていたライダーの動きが止まる。

「なかなか粘りますね。仕方ありません。心優しいこの子を強制しなくはなかったのですが。私の宝具を見せて差し上げましょう。」

ライダーの手に手綱のようなモノが出現する。

≪騎英の手綱!!【ベルレフォーン】≫

ライダーがペガサスに手綱を着けたとたんにペガサスを覆う魔力が爆発的に上昇したのが、圧力となって伝わってくた。

これで、ライダーの隙をつくどころの話ではなくなった。あの上昇した魔力の前には通常の攻撃ではいくらカズマの力でもペガサスの背に乗ったライダーを仕留めきるのは不可能である。

「手綱が宝具!!あのペガサスがそうじゃなかったのか!」

カズマは剣を握る手に更に力を込める。

セイバーもカズマと同様に剣をさっきより強く握っている。

「あれは恐らく騎乗兵としての、彼女の能力の具現です！それが宝具となれば天馬のような格の高い幻獣を従えるのも頷ける！」

セイバーは上空を睨みつる。

上空にいるライダーが更にだめ押しのように告げる。

「それだけでは、ありません。私の手綱はこの子の潜在能力を極限まで発揮させる。」

今までいた高度から更に高度から上げるためにライダーの騎乗するペガサスに駆ける。

「その力の程をたっぷりと思い知らせてあげましょう。」

ライダーが先ほどいた高さの倍に達する。そこから一気に下降してくる。

しかし、この攻撃は2人が待つていた一番隙が大きいモノであった。

「…どうするセイバー？」

カズマが下降してくるライダーを見ながらセイバーに尋ねる。

「相手が宝具でくるならこちらも宝具で向かい撃つ他ありません。」

「いけるのか？…と言うかアレに勝てるのか？」

カズマはセイバーの正体も宝具も知らない。勝てないのなら、すぐさまセイバーを撤退させなければならない。

そしてカズマが' あの宝具' を使いライダーを撃破する。

「問題ありません。この一撃でライダーを倒します。」

セイバーの回りから膨大な風が吹き出す。不可視であった剣の姿が徐々に見えてくる。

「風……いや、膨大な空気を圧縮することで光の屈折を曲げていたのか。」

全ての空気がとれ剣はその全貌を見せる。

セイバーの持って剣はとても美しいくカッコよかった。

「ライダーよ。貴女の宝具に、私も宝具で応えましょう。」

セイバーの剣にまるで星ぼしの光を集めたかのような輝きを発する。

その輝きが最高値に達した時点でセイバーは剣を大きく振り上げる。

互いの口上が始まる。

「猛ろ!天馬よ!!ーー天上の神々に愛された美しき我が子よ。その蹄を轟かせ、眼前の敵を蹴散らすのですが。」

ライダーの下降してくる姿はまるで流星だった、それを向かい撃つは。

「助かったぞ。ライダー、ここならば大地を焼け野はらにせずに済む。ーーこの一閃で、我々の進むべき道を切り開く！」

セイバーがビルの端まで前に出る。

「ゆくぞッ！！」

「≪約束された勝利の剣【エクスカリバー】≫！！！」

セイバーの降り下ろした剣の先端からまるで大型のレーザービームのような凄まじい光の奔流放たれる。

上空で流星とレーザービームが正面からぶつかり合う。

ぶつかり合った空はまるでそこだけ、昼間になったように明るくなる。

「ッッ！！」

あまりの眩しさに、カズマは顔を腕で隠しながらも、眼を細める。

セイバーの宝具とライダーの宝具……勝ったのは……。

「何っ！！」

ライダーの乗るペガサスが押し負けはじめる。

「おおおおおおおぉぉぉぉぉぉ。」

ーーセイバーの方だった。

「馬鹿な……。この子が敗れるとはーー。」

ライダーはセイバーの放った膨大な光の奔流に飲み込まれ、跡形も残らす消滅した。

光の奔流は、そのまま空へと登っていった。

カズマが顔を上げ空を見上げると雲が斬れていた。まるで世界を断ったような一撃だった。

「すごいな。今まで見たことのある宝具の中なら間違いないなく最強だよ。」

カズマは、ゆっくりとした足どりでセイバーのもとに歩いていく。

そして、セイバーの隣に立ち頭に手を乗せクシャクシャと撫でる。

セイバーの髪はスゴくサラサラしていて触り心地は最高だった。

「終わったな、セイバー。キャスターと合流して……さぁ、帰ろう。」

セイバーが振り返る。宝具を使った影響か、顔に疲れが見える。

「はい。カズマ。」

セイバーと並んで、半壊した屋上を後にする。

……

ビルの隅でワカメの持っていた革製の本が崩れてなくなっていた。

「ううううあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。」

2人の居なくなったなった屋上で、ワカメの嘆きの咆哮が響きわたった。

……

ビルを出てすぐにタマモと合流し、3人は帰路についていた最中にふと、ワカメの事を思い出した。

「あっ。」

カズマは思い出す。

「……？マスター、どうかなさいましたか。」

カズマの腕に引っ付いて歩いていたタマモが顔を上げ聴いてくる。

「いや、あのワカメ頭、ビルの屋上に放っといて帰って来ちゃったな～～って、と思い出して。」

「別に放っといても大丈夫じゃないんですか～。あれはどう考えても……どこからどう見ても小物ですからね～。サーヴァントを失った今、もう聖杯戦争には関係ある人物ではなくなったでしょうしね。」

「だから、わざわざ戻って止めをさす必要はないと。」

「はい～～。その通りです。マスター。」

タマモは笑顔を浮かべながらカズマの顔を真っ直ぐ見つめる。

セイバーも会話に参加してきた。「私もサーヴァントを失ったマスターを殺す必要はないと思います。」

「……そうだな、別にいっか。仮にまた来たらその時もまた倒せば済む話だしな。」

カズマもワカメの事をこれ以上深く考えるのはやめ、自宅へ向かって歩いて行く。

ライダー、脱落。

残りのサーヴァント――
??人

セイバーの宝具（後書き）

次の話は、かなり短くなる予定です。

サーヴァントを失ったワカメ…もとい慎二のあの後の話をします。

どうなることやら。

間章・慎二の行方（前書き）

今回は間章です。

かなり短いです。それではどうぞ！！

間章・慎二の行方

……

カンカンカンカンカンカンカン、っと階段を降りる音が響く。

「くそ。くそ。くそ。くそ。くそ。僕のサーヴァントが負けるだなんて、とんだはずれのサーヴァントを引かされた！」

慎二は、焦点が合っていない眼、おぼつない足どりと呪詛のような呟きをしながら、ビルの階段を下っていた。

「サーヴァント、サーヴァントさえ良ければ、僕が負けるだなんてあり得ないのに。僕、僕、僕は、選ばれた人間なんだから！！」

何度、何度、何度、何度、何度、何度もぶつぶつと口の中で囁きながら屋上から地上に向けて階段を下り続ける。

そんな慎二が大広間がある階を通りすぎようとした際に声をかけられる。

「あれ、貴方は生きてたんだ。てっきりカズマお兄ちゃんに殺されたと思ってたのに。」

「な、だ、誰だ！！」

慎二は、声が聞こえた方向に体を向ける。

その階の大広間に立っていたのは、幼い容姿に銀髪、暖かそうなコートを着た少女、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンだった。

「カズマお兄ちゃんが殺んないんだったら私が殺っちゃうね。殺っちゃえバーサーカー！！」

喚ばれて出現したのは、カズマ達が戦った鉛色の肌を持ち、岩から削り出したかのような斧剣を持った、巨人だった。

「ひぃ。」

慎二がバーサーカーの姿にびびりまくり、その場に尻餅をつき悲鳴を上げる。

「ーーーーーーー！！！」

バーサーカーが大音量の咆哮を上げ、慎二に接近し手にした斧剣を振り上げる。

「あっ。」

自身の死を目の前にして、慎二が間の抜けたような声をだす。

バーサーカーが斧剣を降りおろす。

まともに食らえば、サーヴァントであろうと間違いないなく即死の一撃。

だが、その一撃が慎二に当たることはなく、空中で不自然に止まる。

「な、なに!?」

「えっ?」

慎二は目の前で止まっている斧剣をみる。すると斧剣を持っている腕に鎖が巻きついているに気がつく。これがバーサーカーの動きを封じなのだ。

そしてそこに、カッカッカッカと誰かが歩いてくる足音が、イリヤスフィールと慎二の2人の耳に聞こえてくる。

「器よ、その小僧はこちらが先に眼を着けていたのだ。それを横から掠め取ろうとするとは……無礼者め…死ぬがいい。」

どこからともなく何十もの剣が出現し、イリヤスフィールに向かい飛んでいく。

「ッッ、バーサーカー」

イリヤスフィールが己を守るようにバーサーカーに命じる。

バーサーカーは、自身の体を盾に主守る。

バーサーカーの体に飛んできた剣が次々に刺さり、まるで剣山ようになる。

「ーーーーーーー！！」

バーサーカーは、悲鳴だかなをだかわからない咆哮を上げる。

「ふむ、存外しぶといな。」

1人の男が通路の影からから姿を現す。

その男は黄金の鎧を身に纏い、何十もの宝具を背後の空中に展開していた。

間章・慎二の行方（後書き）

次は本編に戻ります。

日常編・3人でお出かけ（前書き）

今回は日常編なので、バトル成分少なめで行きます。

カズマ達がライダーを倒したことで一息入れます。

日常編・3人でお出かけ

ライダーを、倒した翌朝。
カズマの邸宅。ダイニングにて。

朝食後、カズマは遠坂に携帯から電話をかけていた。

ちなみに電話番号は、グラスの連絡帳に載っていたので調べたり、先生に尋ね必要がなかったので助かった。今時は電話番号もプライバシーがどうたらで、何かしら理由等を作らないと教師も他生徒の情報は教えてくれない世の中だからな。

携帯電話を片手で持ち、番号をしっかりと確認後、打ち込んでいく。

「遠坂、いるなか？いなかったら留守電にライダーを倒した事だけでも入れておこう。」

プルルルプルルルプルルル。

と、何度かのコール後、ガチャという音がしてカズマの携帯電話の表示が発信中から通話中に変わる。

「お、遠坂かな？」

携帯を耳に近ずけ、会話をする体勢に入る。

「もしもし、遠坂さんのお宅ですか？」

「そうですけど……あっ！！その声は、聖都くん。」

「よかった。遠坂本人みたいだな、親御さんが電話にでたらなんて言おうかちょっと考えていたんだよ。」

「なんの心配してるのよ！あんたは。……なにより私の両親…１０年前に死んでるし…」

遠坂の家は魔術師の家系、そして１０年前ってことは……セイバーが言っていたこの土地で聖杯戦争のあった時期だ。なら遠坂の両親は聖杯戦争参加して死んだのだろうな。

「……何て言ったらいいかわからないから…とりあえず謝っとく。変な事を聴いてすまない。」

電話越しでも伝わるように誠意を言葉に込める。

「なに、謝ってんのよ！魔術師ってのは、いつ死んでもおかしくないんだから別に気にしなくてもいいわよ！」

電話越しに遠坂の怒声が伝わってくる。

「そうだな。」

「……で、要件はなに。なんでで私に電話してきたわけ。私達一応敵同士なんですけど。つまらない要件ならブッ飛ばすわよ。」

「ははッ。それは怖いな。この情報をつまらない、つまらななくな

いはそちらできめてくれ。ーーでは遠坂、昨日俺達3人でライダーをかたずけた。伝えたかったのはそれだけ。もし知っていたんだったら、すまないな。」

「そう、倒したんだ。……マスターは殺したの？」

「いや、殺してはいない。ライダーのマスターだった慎二は生きていると思うぞ、多分だけど。」

何気ないカズマのセリフに遠坂が息をのむ。

「ちょ、それ、本当の事なの聖都くん！慎二がマスターだったって。」

遠坂が慌てたように声をだしながら訪ねてくる。

「ああぁ。確かだ。ライダーは慎二を守っていたし、慎二も魔術を使っていた。まっ、エセ魔術ではあったがな。

「うそ。そんなわけない。慎二にそんな事できるハズないのよ。」

電話越しではよく聴こえないが遠坂は向こう側でブツブツとなにか呟いている。

「？？遠坂。どうかしたか。なにがありえないんだ。」

カズマは断片的に聴こえてきた情報から軽く遠坂に質問してみる。

「聖都くん。教えてあげる、慎二の家の家系はね…父親の代で魔術回路が消失しているの、だからねマスターにはなれないのよ。」

魔術回路が消失？……何があったんだ。魔術師から魔術回路がなくなるなんて事がありえるのか。

「不思議に思っているようだから教えてあげる。慎二の家系…まとうはね元々は海外の魔術師だったの、それがこの地に聖杯を造る為にやって来て、この冬木の町に根を着けた。たがそれがいけなかった……まとうの血はこの土地には合わなかった。だから代で重ねるごとに魔術回路が減っていき慎二の代で完全に魔術回路がなくなった、ーーーだから慎二がマスターになるなんて事は出来ないのよ。」

そういう事ってありえるのか～～。って感じで遠坂の話を聴いていた。カズマの家の連中は増えるばかりで減ったことはないので解らなかったのだ。とはいえ、増える事があれば減ることもある当然といえば当然の話ではあった。

「魔術回路って減るんだ……。初めて知ったよ。」

「アンタね、そんな事も知らなかったの。当たり前でしょうが！」

遠坂が電話越しにため息をついている。

「すまんな。俺んちの両親も、俺の魔術の師である祖父もそんな事は一言言わなかったからな……」

「アンタの家は、一体どんな魔術教育をしてるのかとても不安だわ、そんな事も知らなかったなんて。」

「すまん。んっ……そうだ、お礼がわりに一つ良いことを教えてやろう。」

「……良いこと？」

遠坂は怪訝そうな声が携帯から聴こえてきた。

「ランサーの正体だよ。あいつの宝具は‘ゲイ・ボルグ’…遠坂ならこれだけであいつの真名はわかるよな。」

遠坂からの返事がこない、正体を考えているのだろう。

「……なるほど、あの全身青タイツ…ケルト神話の大英雄ってわけね。道理で強いわけだわ。」

遠坂の推理は大正解だ。ランサーの正体はケルト神話の大英雄、光の御子とも言われる‘クーフーリン’だ。

「これにてお礼はすみました。じゃ、電話を切るぞ。俺達一応敵同士しな訳だしな……。」

カズマは耳から携帯を離し、通話切りボタンを押そうした直前で遠坂から凄まじい怒声が響いてきたので、思わずボタンを押そうとしていた指が止まり携帯を自分の耳から遠ざけようと腕を可能な限り伸ばす。

その声の大きさは本当凄まじい限りだった。

だって居間でテレビを観ていたセイバーがビックリした表情でこちらを見ているし、キッチンで朝食の洗い物をしていたタマモが普段は隠してある頭の狐耳と臀部からはえている狐尻尾が普通に見えてしまっている。耳は立っているし、尻尾の毛が総立ちになってしまっている、余程ビックリしたのだろう。

「と、とお、遠坂さん?そんな大き声を出さなくてもちゃんと聴こえてますよ。」

あまりの迫力に思わず丁寧語にカズマ。

「アンタね!!勝手に情報教えるだけ教えて、勝手に会話を終了して、勝手に電話を切ろうとしてんじゃないわよ!私はね借りを造ったままなのが我慢ならないのよ!!」

「いや、あのな。情報を教えたのはお礼であって、貸しとか借りとかを遠坂が気にする必要は……」

「黙りなさい！……そうね、貴方に私の知っている他のマスターの情報を教えるわ。それで借りを返すわ。」

遠坂の後ろで彼女のサーヴァントである赤い外套を身に纏った男がヤレヤレと肩をすくめている姿が眼にうかんでくる。

「他のマスターの情報か……確かに欲しくはあるな。でも、本当にいいのか？」

「当たり前よ！私を誰だと思っているわけ！？」

そんなやり取りをして、カズマはランサーのマスターの外見の特徴と戦い方のスタイルを遠坂からもらった。

外見の特徴は、先ずは女性であること。
次に背は高く、短髪、薄い紫色の髪に鋭い目付き、手袋をしていてスーツを身に纏っている。

戦闘スタイルはカズマと同様で、自ら全線に出てサーヴァント相手に戦う、例外的なマスターである。純粋に格闘術だけでも戦闘力は遠坂の見立てでは、カズマの方が強い。魔術を使えば圧倒出来るだろう。

サーヴァントと戦う為に、何か切り札らしき武器を持っている可能性あり、彼女が背に持っていたバックが怪しかったとか。

「なぁ、遠坂。」

「なによ。」

カズマは、疑問に思ったことを聞いてみることに。

「なんでそんなに詳しいんだ？……まさか、遠坂が昨日休んだのは…。」

「そのまさかよ。昨日の夜、ソイツとやって命からがら逃げてきたのよ。本当に死ぬかと思ったわよ。」

……

「ーーーと、いった感じの話しを朝、遠坂としていた訳なんだよ。」

現在カズマ達3人は、新都に向かうためにバスに乗って移動していた。

3人が座っているのはバスの一番後方の一遍に5人ほど座れる席だ。

そこに、右からタマモ、カズマ、セイバーといった順番に座り、3人は右側にも左側にも寄らずカズマの正面が通路真ん中になるよう

に座っている。普段ならマズイと思う事だが、バスにはほとんど人が居ないのでやっている。今日は平日だが学校はワカメのサーヴァントであるライダーの妙な結界のせいで休校中なのだ。

「マスター、今そんな話しないでくださいよ～～。せっかく新都に遊びに行くんですからそーいうことは後でお願いします。」

タマモは、カズマの肩に体を預けながら顔だけを向け抗議してくる。カズマには、そのちょっと拗ねたような表情も可愛くてたまらないわけだが。

「せっかくの情報を忘れないように早めに伝えてくれたカズマに文句を唱えるのですか？」

「文句じゃありませ～～ん。ちゃんと私生活と聖杯戦争とを分けて考えて欲しいっていう提案で～す。」

セイバーに注意されるがタマモはのらりくらり言い回避する。ビキリと、セイバーの額にでっかい青筋が何個か浮かぶ。

「ま、まあまあ。２人共落ち着け。キャスターの言いたいこともわかるし、セイバーの聖杯戦争に対する真面目な気持ちも……多少は理解できる。」

「マスター、本当にわかっていますか？…ちゃんと私の事、大事に思っていてくれていますか？」

「カズマ、あまりキャスターを甘やかしすぎではないですか？聖杯戦争は気を抜いた者から死んでいくものなんですよ！」

2人の言葉がカズマの左右の耳から同時入ってくる。カズマは聖徳太子ではないので出来れば片方ずつ話して欲しかったのだがな。

バスの車内で、3人そんなやり取り続けていた。そして、そんなやり取りをしながらもバスは移動し続けており……少したちカズマ達は、新都に到着した。

移動分の料金を払いカズマ達3人はバスから降りる。

「まずは、お昼御飯にしましょう。私良いお店、知っているですよ～～。さぁ、マスター行きましょう。」

バスから降りた途端にタマモはカズマの腕に自分の腕を巻きつけて、グイグイと引っ張って行こうとする。

「わっと、キャスターそんな引っ張っるな。」

「今日は、めいいっーーぱい羽を伸ばすんですから、のんびりなんてしてられません。」

「あっ。待ちなさいキャスター。カズマが迷惑しているのが貴女にはわからないのですか。」

タマモに腕を引っ張っられながらカズマは、新都の町中に紛れていく。

セイバーは早足で追いかけくる。

ちなみにセイバーとタマモはすっごい目立っていた。町を歩く男性陣のほとんど人が振り向くくらいに。

まぁ、セイバーやタマモ方向性は違うが、彼女達程の美人が歩いていれば仕方ないことではあるのだが……。

一方、カズマの方には、そんな美人を2人も連れて歩いている訳だから、羨望と嫉妬、恨み、殺気等々を込められた視線にさらし続けられたわけだ。

その後、カズマ達3人は色々な場所に行った。

良い感じの店で食事をして、大型のデパートで、セイバーとタマモの服をカズマのセンスで見繕ったり、映画館で、アクション映画を満喫し、おしゃれな店でアクセサリーなどを眺め、遊んでいる内に時間が午後7時を回ってしまったので、夕飯も外で済ませ帰宅するため再びバスに乗ることにした。

来たときは手ぶらだったが、今現在はカズマは普通だったら両手でも余るくらいの紙袋や箱を抱えている。

「カズマ、私も少し持ちます。荷物を貸してください。」

セイバーは自分の分の荷物くらいは持とうとするがカズマが断る。

「大丈夫だよ、セイバー。これくらいでへばるほどやわな鍛えかたは、してないから。」

笑いながらやんわりとセイバーの手伝いを断るカズマ。

「……しかし…」

「それより、今日は楽しめたかセイバー？」

「……それは……はい。」

セイバーが頷く見てカズマは満足そうに頷く。

「そっか、それは良かった。今日は俺とキャスターが無理矢理連れ出したような感じだったからな……もしかしたらつまらないんじゃないかなって、思っていたんだが……俺の取り越し苦労だった訳だな。」

カズマは安堵する。

「セイバーとイチャイチャしてないで、マスターーー。速く帰りましょうよ。」

カズマ達二人から少し前にいたタマモがこちらに振り返り手を大きく振り速くくるように促してくる。

「ああ、わかったよ。行こうセイバー。それから俺はイチャイチャなんてしてないぞ。」

「はい。そうですね、カズマ。」

カズマとセイバーは足を速めてタマモに追いつき、自宅へ急ぐのだった。

……

カズマ宅、周辺の道。

「結構遅くなっちまったな。」

財布から自宅の鍵を取りだしながらカズマはいう。

「でもおかけで今日は精一杯遊べてたっぷりと英気を補給出来ました。これで明日からの聖杯戦争を頑張っていけますよマスターー。」

タマモは、万歳した腕を両手を、胸を前で付き合わせてガッツポー

ズをとる。

「そっかじゃ、明日からのまた頑張ってもらうずぞキャスター。」

「はい。おまかせくださいマスター。」

「私もいままで以上に頑張らせてもらいます。」

バス停から歩き…

そして、自宅へ到着し門の鍵を開けようとした時に、カズマとタマモがほぼ同じタイミングで異変に気ずく。

「マスター。」

「ああ、キャスター気をつけろ。」

カズマとタマモが表情の引き締まる。

「…カズマどうかしたのですか。何かありましたか。」

カズマは両手に持っていた荷物を門から少し遠ざけた場所の地面に置く。

「ああ、どうやら招かざるお客様が来ているらしいな……キャスターや俺がここまで接近するまで気ずかなかったって事はーーどうや

ら来ているのは。」

バァァァンっと思いっつきり派手に門を蹴りあける。

セイバーとキャスターは瞬時に武装化し戦闘体勢に入る。カズマは右手に日本刀を投影する。そして、３人は勢いよく侵入する。

（借り家とは言え、自宅に入るのにこんな乱暴な入り方はないよな……。）

ふと、カズマはそんな風に心中で考えたが、すぐに気持ちを切り換える。

侵入後は素早く周辺の安全を確認後、庭の方へ移動する。

「何処にいやがる。」

カズマが、小さく言う。

庭に入ると、鍵を閉めてあったはずのダイニングの所の窓が開いていて、その奥の部屋の隅で隣の家に住んでいてどきどき遊びにくる、藤村さんが倒れていた。

倒れている藤村さんを視界に納めた瞬間にカズマはすぐさま駆けよった。

「藤村さん、藤村さん。大丈夫ですか！」

倒れていた藤村さんを抱き上げ揺さぶる。

「マスター、罠かも知れないのに突っ込まないでください。」

「カズマ！すぐに戻って。」

外で待っている2人から警告の声がかかる。

「わかってる、すぐに戻る。」

カズマは藤村を肩に担ぎ2人の元に帰ろうとしたところで、カズマの耳元に声が届く。

「あら、もう帰っしまうの……ここは貴方達の自宅でしょう？…だったらもう少しゆっくりしていったらどう？」

「っつ！！！！」

声が聴こえた方に右手にで持っていた日本刀で切りつける。

ズバァァッッと何かを切り裂く手応えが日本刀から伝わってくる…

…が、デコイだとすぐさま気ずく。

藤村さんを抱えたままなんとかこの場から離脱しようとカズマは試

みるが、失敗に終わる。

なぜならカズマのすぐ目の前に突然、魔力弾が出現したからだ。

「くッ！」

回避は間に合わない、カズマの対魔力なら怪我一つ負わない程度の魔力弾だが…対魔力が守ってくれるのはカズマ本人だけ抱えている藤村さんは、守ってはくれない。となればもし喰らえばカズマは無事でも藤村さんは死んでしまう。

「仕方ない。」

体勢的に自分のサーヴァントであるセイバーとタマモに投げ渡すのは無理なので、安全圏だと思われる同じ部屋の隅に落ちたさいにできるだけ怪我をしないように投げる。

藤村さんを投げると魔力弾がカズマに直撃する。

ドォォォォォォォンっと凄まじい音を発てて、爆発した魔力弾が部屋を揺るがす。

「「マスター（カズマ）！」」

セイバーとタマモの悲鳴のような声が重なる。

効かないとわかっていても心配してしまう2人だった。

もくもくと部屋に煙が立ち上る。

「大丈夫だ！２人共。」

部屋にこもった煙がある程度晴れ、カズマの傷一つない姿が見えてくる。

「ほっ。マスターあんまり無茶させないでください。心臓が止まるかと思いました。」

「マスター、無茶は止めてください。貴方が殺られたら終わりなんのですから。」

「悪い。けどマズイ事態になっちまったよ。」

カズマは厳しい目つきで眼前を見据えている。

「たいした対魔力（アンチマジック）ね、坊や。私の魔力弾で無傷だなんて……貴方、本当に人間なの。」

部屋の中で、カズマの前に立っていたのは、藤村さんを抱えて悠然と微笑んでいる紫色のローブで全身を包んだタマモとは違うキャスターだった。

日常編・3人でお出かけ（後書き）

次からは、再びバトルシーン多めで行きたい考えています。

キャスターの強襲（前書き）

今回はキャスターが強襲してくる辺りから、迎撃して追い返すところまで進みます。

相変わらずの文才０の文章ではありますが、読んでくれている皆さんが少しでも楽しんで下さっているのなら幸いです。

キャスターの強襲

もくもくと部屋の中に煙が外へと逃げていき、今現在部屋のカズマの状況が外にいるセイバーとタマモにも明らかになっていく。

「「マスター（カズマ）。」」

セイバーとタマモが庭からカズマを呼ぶが、カズマはそれに答える事なく眼前の紫色のローブを着たキャスターから一瞬たりとも目を離さずにいる。

なぜなら……。

「人質ってわけかい、サーヴァント……英霊のくせにやることせこいんだな。」

キャスターの隣には気を失っているのかぐったりとした藤村さんがいる。

意識がないはずなのに藤村さんは自らの脚で立っている。キャスターに操られているのだろう。

「貴方のような人外とまともに戦うなんてナンセンスよ。これは戦争ですもの、勝つために利用できるものは何でも使用しないとね。」

「お前は弱そうだもんな。」

カズマは軽口を叩きながらも一瞬のスキも逃すまいとキャスター鋭く睨み続ける。

「この人間が大切なら下手なことはしないほうがいいわよ。こんな何処にでもいる人間を殺すなんてすぐにできるですから。」

「だろうね……。」

呻くようにカズマはキャスターの解を認める。当たり前の話しである、藤村さんは魔術師ではないのだから。

カズマはキャスターのスキを探り続る…。スキ事態はかなりある。キャスターは本当後方支援が元々の仕事。

自ら前線には出ないので接近戦は領分ではないのだろう。

だが、迂闊には攻撃出来ない。今現在、キャスターの手は藤村さんの頭部に置かれている、カズマがどんなに速く仕掛けても、キャスターが藤村さんを殺す方が断然速い。

藤村さんを犠牲にして良いのならカズマはキャスターを倒せるだろうが……カズマの中にそんな選択肢はない。

「人質を取ったって事は何か狙いが有るんだよな。聞こうか。」

冷静にカズマがキャスターの目的を問う。

「物分かりのいい坊やね。ええその通りよ。私は貴方のもつ2体のサーヴァントが両方共欲しいの……あの忌々しいバーサーカーを始末するためにね。」

「「!?」」

今のキャスターの発言に部屋の外にいたセイバーとタマモがビックリしたと同時にかなり嫌悪感を抱いた表情をした。

「バーサーカーならその内俺達がかたずけてやる…それでは駄目なのか?」

「それでは駄目よ。だってそれではバーサーカーを倒した後に、私は貴方達に殺られてしまう。バーサーカーを始末するのも目的の1つだけど、過剰な戦力を有する貴方の力を削るのも目的の1つなの。わかってもらえたかしら?」

「要するに、俺の戦力を割きつつ自分の戦力は増強したい、だから俺のサーヴァントが欲しいって訳か。」

外にいるセイバーとタマモが非難の声を掲げる。

「キャスター！！貴様！」

「ホント、せっっこいですね。器がしれますよ？」

2人の非難の声にキャスターは煩わしそうに答える。

「うるさい小娘達ですこと。これも戦略の1つですわよ。」

「確かにな。」

セコい手ではあるが、これが戦争である以上は有効な手であるのは認めざる得ない。

「さぁ、無駄話はここまでよ。坊や令呪を差し出しなさい、でないとこの娘の頭がなくなってしまうわよ？」

藤村さんの頭部を掴んでいるキャスターの手に魔力が集まる。

「くっっ。……わかった。」

歯ぎしりをしながらカズマは呻くように答え、キャスターを刺激しないようにゆっくりと歩いて近ずいていく。

「そう、いい子ね。大丈夫その子達2人をもらったらこの娘は無事に返してあげる、それに約束するわ。」

セイバーが叫ぶ。

「カズマ！駄目です、そのキャスターは町中から人々の魔力を吸い上げるような非道な手を使っているのです！とても約束を守るとは思えません。」

「私嫌ですよーー。そんな奴のサーヴァントになるなんて！」

2人が喧喧囂囂と敵キャスターへの嫌悪感や文句を言っている中……。

カズマはセイバーとタマモの方をチラッとあまり頭は動かさず、眼だけで見る。見たのはタマモとアイコンタクトをとるためだ。

「……（コクン）」

頷くタマモ。どうやらカズマの考えてを察してくれたようだ。……セイバーにはやはりまだ伝わらないのか、まだ色々と叫んでいる。カズマはキャスターの一歩前の位置で歩みを止める。

「そこでいいわ。止まりなさい。」

「リクエストを聞こう、どちらから先に欲しい？」

「そうね……。」

顎に軽く人差し指をあて考えるキャスター。

「やはりまずはセイバーからにしましょう。あちらの狐耳のキャスターはその次ね。」

「……わかった。」

キャスターの前に左手を差し出すカズマ。

「カズマ！」

セイバーが悲鳴のような声を出す。

キャスターが手のローブの裾から妙な輝きを放っている奇っ怪な形の短刀を取り出す。短刀の形は幼稚園児が雷はどんな風に落ちますか？と言われれば、１０人１０人がギザギザの形を書くであろう、そんな形だ。あれではろくに人間１人殺す事さえ出来ないだろう。

カズマは眼に写ったその短刀をすぐさま自分の‘世界’の中に取り込み解析を開始する。

１秒も経たず短刀の解析が終了する。

（これは……！！ヤバイな。コイツが取り出した短刀…宝具だ！）

表情には出さないかカズマは心の中でイヤな汗を流す。

（俺から引き離し、自軍にいれるような事を言っていたから洗脳系のモノかと予想していたんだか……まさかもっとヤバいモノを持っていたとはな。）

そうキャスターが持っている宝具は、【破戒すべき全ての符≪ルールブレイカー≫】突き刺した相手の魔術を無効化する宝具である。

キャスターが短刀を持った腕をカズマの左手に狙いをつけて大きく振り上げる。

「ふふっ。さようなら…坊や。」

キャスターがカズマに向かって嘲笑とも呼べる声で別れを告げる。

「……それはどうかな？」

眼前にいるキャスターにも聴こえない程の音量でカズマは言う。

そして勢いよく振り下ろされる短刀。

短刀がカズマの左手に触れる直前にカズマは囁く。

「トレース・オン」

瞬間、カズマの左手の少し上に日本刀が出現し、左手の骨と骨の間を突き刺さり貫通する。

すると日本刀の落下の勢いに手が押され、キャスターの短刀が当たる事なくギリギリの所で躱すことに成功する。

「ふっ！」

ここまではカズマの計算道理である。

日本刀と左手が地面に縫い付けられそうになるがそうはならなかったカズマは突き刺さった日本刀の勢いを利用しその場で高速で空中で前方回転する。当然、日本刀の刃の方面を外にし刺さった部分の肉を斬れやすくしていた。

そうなれば当然、左手から鮮血が溢れ出すがカズマは気にしない。

「ハッ！！！」

回転した勢いを利用しカズマは目標をなくしたキャスターの短刀の

柄の部分に足の裏を叩きつけて地面である畳にめり込ませる。

「え？」

キャスターはあまりに予想外の展開なのか、あまりに間の抜けたような声を出す。

いや…カズマの動きが速すぎて見えていないだけかもしれないが。

もしくは両方か。

ドゴンッとする凄まじい音を響かして畳に刃の根元まで突き刺さりるキャスターの宝具。

自分の手にしていた短刀の急なスピードアップにキャスターの握力は耐えられず、キャスターは自らの宝具を離してしまっていた。

体勢も同時に崩れ、藤村さんの頭部に置いてあった手が離れる。

カズマはこんな度しがたいスキを逃がす程お人好しではない。

「死ね！」

短刀の柄の部分に脚を乗せたまま、カズマは眼前にいるキャスターに向かって右足で、前蹴りを叩き込む。普通の足の裏を叩きつけるような前蹴りではなく、足首から先を伸ばした状態。……要するに相手の体を貫通する足形で蹴りこんだ。

あたり前だか、藤村さんは蹴る直前に引っ張って助け、セイバーとタマモの方に投げ込んでいた。

しかし、そのせいで筋肉が伸びてしまいキャスターの腹にぶちこんだ蹴りに力が乗りきらなかった。

「浅いか！？」

人ん家の壁を突き破り、破壊しながら派手にすっ飛んでいくキャスター。

外まで出ても勢いは止まらず樹に衝突してようやく止まる。そのままズルズルと固い地面にずり落ちていく。

「ガバッ！！」

キャスターが大量の吐血をして地面に血が広がっていく。

キャスターは両手で腹を押さえている、だか腹からの出血は見当たらない……どうやら腹を貫通させるには至らなかったようだ。

蹴りこんだ感触で貫通には至らないとわかっていたカズマは追い討ちをし、止めを刺すためにすぐさまキャスターの後を追う。

キャスターが通過した壁を飛び出し視界に倒れているキャスターを納めた瞬間にカズマは高く跳躍する。

「この外道が！！俺の知り合いに手を出した事を後悔しながら死にやがれ！」

その手にはいつもの両刃の西洋剣が握られている。

キャスターを上空から剣で突き刺すために剣の先端を下にした体勢で、カズマは腹を押さえいるキャスターに落下していく。

「……く…っっ！こん…な……ところ……で、わ、わたしは……。死ね…な……い。」

キャスターは地面に伏したまま、途切れ途切れに死にかけの声で囁く。

「死ぬんだよ！！テメーはな！」

「うっ。」

ドッスンという轟音が辺りに響き渡る。カズマの剣がキャスターの胸部を貫通し地面に穿った音だった。

「ガバッ！！……アアアァァッーーーー！！！！」

キャスターは口から更に吐血し、断末魔の悲鳴を喉の奥、腹の底からから捻り出した。

「あばよ。キャスター。」

カズマは、胸部に突き刺さった剣を抜く事なく地面ごと上半身の方へ切り裂いた。

キャスターの胸部から頭にかけて真っ二つになる。……キャスターが、キャスターだった‘モノ’に成り下がった瞬間になった。

「むっ？」

切り裂いたキャスターの身体がシューーっと、まるで煙のようなものを吐き出しながら消えていく。

「これは……！まさか。」

煙のように消えていくキャスターの死体を眺めるうちに違和感があるのに気がつく。

「これ、本体じゃないです。どうやらマスターの止めの一撃の前に間一髪で精巧な身代わりを盾にして空間跳躍で逃げたかと。」

いつの間にタマモが来ていて消え行くキャスターの身代わりを冷静に観察していた。

「……逃げるの速いな。確実に仕留めたと思ったんだが。」

「でも、マスターがぶちこんだ蹴りのダメージは確実に入っていますよ。外れたのは最後の一撃だけです。」

「それは俺にもわかる。キャスターの身体を貫通までは至らなかったが、内臓は破裂させ、胸骨をボキボキに砕くぐらいの手応えはあったからな。」

「それはもう、俗に言う瀕死状態って感じですね。……そう考えるとなるとよく逃げられましたね、あのキャスター。」

「…だな。」

キャスターを追い詰めはしたが、結局逃げられた事に2人は同時に、これならどうするかの考えをまとめる黙りこむ。

「カズマ、何を立ち止まっているのですか。さぁ、行きますよ。」

セイバーはこちらの返事を待たす、武装化したまま踵を返し玄関の門へと歩いていく。

「そうだな。相手が弱っているなら、そこを叩くのが戦いじゃ基本だもんな。」

「ですね。じゃあ、サクサクいってとっととサクッと殺っちゃいましょう。あのキャスター、うざったくてしょうがありませんから。」

カズマとタマモも互いに意見が同じ事を確かめあうと、セイバーの後を追い玄関である門へと向かった。

門を抜けると、先に出ていったセイバーが待っていてくれたので、カズマ、セイバー、タマモは3人でキャスターの居城である寺、柳洞寺に歩いて行った。

……

「あっ！ちょっと待っていてくれ。」

カズマが何を思い出したのか、柳洞寺に向かう道程の半分くらい歩いた所で一旦自宅へと引き返したので、多少到着までに時間がかかったが、キャスターからの妨害もなにもなく目的地である、柳洞寺に到着した。

……

「柳洞寺って初めて来たけど……かなり特殊な場所だな。寺全体に妙な結界が張られているし、これじゃ結界が開いている正面にある正門以外から突入しようものなら人間の俺は大丈夫だが、サーヴァ

ントである2人は結構な重圧を受けるはめになるな。」

柳洞寺に張り巡らされている結界を確認すると、カズマはどう攻めようか考える。

「カズマ、下手な小細工は不要です。真正面から攻めいり、そのまま瀕死の状態のキャスターの首をとれば勝負つきます。」

セイバーがやる気満々の表情と声でカズマに詰め寄る。

「私もセイバーの意見に賛成です。いくら相手の居城といえど、相手は死にかけのサーヴァント一匹いるだけの場所、精巧な作戦なんていりません！さっさと突撃してサクッと首をいただいちゃいましょう。」

タマモも意気揚々と言い、セイバーと同じく真正面から攻めるき満々のようだ。

「……ま、確かにそうだな。」

カズマも覚悟を決める。

「じゃ、いくぞ！！2人とも。さっさといってさっさと終わらせるぞ！」

3人は、カズマを先頭に、柳洞寺内に入る為にある長い階段を疾走していく。

そしてすぐに、正門にたどり着く。

が、サーヴァントの気配を感じとり3人は正門前の、階段の段と段の間にある少し広め踊り場で急停止をかける。

「何者だ！姿を見せろ！」

セイバーが辺りを見渡しながら声を張り上げる。

カズマは注意深く周囲を見渡す。

「サーヴァントとのくせに隠れん坊をするのが趣味なのかい？」

カズマは正門の隣にある大樹を指差す。

「気配を隠すのがお上手いですね～。……貴方、'アサシン'のサーヴァントですね。」

大樹の影から出てきた男は、長身で、黒い長い髪を頭の1つにまとめていてまるで昔日本にいたサムライのような着物着ており、手には異様なほど長い長刀を携えていた。

「これはこれは、中々に勘の鋭い者が居たようだな。」

「……質問に答えろ。貴様は何者だ、なぜこの場にいる。」

男の方が上段にいるのでカズマは男を見上げながら質問を繰り返し訪ねる。

「なに、女狐にこの門を通ろうとするサーヴァントと敵のマスターをたおすようにと、頼まれてな。門番をしていたのだ。」

男は飄々とカズマの問に答える。

「クラスは‐アサシン‐でいいのかい。優男。」

「ああ、相違ない。私のクラスは‐アサシン‐だ。」

優男が優雅に笑いながらカズマとタマモの問に答える。

「カズマ、ここは私が引き受けます。キャスターと共に中へ。」

セイバーが手にした聖剣を構え一歩にでる。

「いや、セイバー。ここは俺が引き受ける。キャスターと共に中へ行くのは君の役目だよ。」

「しかし、カズマ。」

「私もマスターと一緒の方がやる気満々で行けるのに～。なんでセ

イバーと一緒なんですが！」

セイバーは心配そうにカズマに振り返り。タマモはセイバーと一緒に行く事に文句を言ってくる。

「対キャスター（魔術師）戦なら、これがベストだ。セイバーの対魔力はおそらくAで俺より上、だったら俺じゃなくセイバーで戦った方がより有利に戦える。それにキャスターの後方支援があれば完璧だろう？」

「それは確かにそうですが……。」

「む～～。正論すぎて言い返せません。」

セイバーとタマモが納得させるとカズマが2人の前に一歩進む。

「待たせ悪かったな。さぁ始めよう。」

一段、階段を登る。

「トレース・オン。」

カズマはいつもの両刃の西洋剣ではなく、両腕には武骨はガンレット、脚は洗練された外観ながらも実戦を視野に入れて造ったのであろう防御力高そうなブーツ。更に両手には互いに長さの違う日本刀が握られている。

「…2人は戦闘が始まったらすぐに門を抜けてくれ。」

「了解です。」

「う～～。はい、わかりました。」

2人の返事を聴いてカズマの全身に凄まじい魔力と闘気が噴出させ、アサシンのサーヴァントに一段、一段慎重に近ずいていく。

タマモとセイバーもいつでも走り出せるように足に力を溜めている。

が、そこまで御膳立てをしていたカズマ達にアサシンが予想外のセリフをはいた。

「やる気満々のようだか……まあ待て。今ここで、お前達とやりあうつもりはない。通りたければ、通るがよい。」

「はぁ。」

やる気が削がれるて、階段を踏み外しそうになるカズマ。

「どうゆうつもりなんですか？貴方はここの門番してるんですから私達を通さないようにするのが役目なのでは……」

カズマの後ろからタマモが問う。

「フッ。番犬も尻尾を振る相手がおらぬのでは、意味がないのでな。」

アサシンが刀を下ろし、カズマ達に背を向ける。

「どういうことだ。」

「これ以上、私の口から語る必要はあるまい。行ってその目で確かめてみるがいい。」

アサシンはそのまま階段の横にある林まで歩いていき姿をくらましてしまう。

「……まさか！」

「ええ、おそらく。」

「マスターが考えている道理の展開かと。」

3人はすぐさま門を抜け柳洞寺に寺中に入る。

そこで3人の目に飛び込んできた風景は…。

数百匹は軽くいるであろうはいるであろう竜牙兵の軍団だった。

「逃げたな、あの女狐……。」

「足留めの魂胆が見え見えなんですけど～～。」

「さっさと片ずけてキャスターを追いましょう。」

カズマ達が入ってくるのを感知したのか、竜牙兵が武器を構えて雪崩のごとく襲いくる。3人は慌てることなく、各々の武器を構え掃討戦を開始する。

カズマは二刀の刀で先陣をきり、襲いかかってくる竜牙兵はまるで削岩機に突っ込んでいくかのように次から次へと粉々になっていく。

セイバーの方に行く連中はそれこそまるで、竜巻に巻き込まれたたかのようにバラバラになり。

タマモの方に行く奴等は、炭化に、氷像、粉末に、腐ったりと、バリエーション豊かに殺られてただの骨になってゆく。

……

何百匹はいた竜牙兵だが、モノの数分で全滅した　。

「…かたずいたか。そーいや、この寺にいる坊さんとか無事なんだろうか？」

ガンレット、ブーツに刀も全て消しカズマは靴を脱いで寺の建物の内部へ足を進めていく。

「あっ。マスター、私もついていきます～。」

タマモがカズマについてくることに。

「私はこのまま外で警戒していましょう。」

「任せた。」

「了解です。カズマ。」

セイバーを外に残しカズマとタマモは、坊さん達の安否を確かめる為に寺中の部屋を全て見て回ることにした。

……

寺中の中の探索を始めて1部屋目でカズマは携帯電話を使い救急車を呼ぶ。寺中は凄惨な事になっていたからだ。

坊さん達が中々表現しにくい外観になっていた……1人残さずに。

……

坊さん達を救急車などに乗せやすいように部屋から出しておく。

「キャスターの回復の術は応急処置程度のモノだが……それでもやらないよりはマシだしな。」

タマモが部屋から出した坊さん1人1人に回復効果のある札を頭部に張りつけていく。

最後の1人に札を張り終えたのを確認後、カズマは2人に声をかける。

「2人共、帰るぞ。一応、教会の神父にも連絡しといたから後はアッチで何とかするだろ。」

「ですが……瀕死の彼らを置いて行くのは少しばかり気が引けます。救急車が来るまで我々が看ているべきでは。」

セイバーが戦いに巻き込まれた坊さん達を心配して、そうカズマに言う。

「俺もそうしてやりたいのはやまやまなんだが……救急車の乗ってくるであろう人達に理由が説明出来ない。普通、こんな時間に寺にくる人なんていないからな。」

「それは……そうですが……。」

セイバーが俯く。

「あの人達のことならあまり心配する必要はありませんよ～～。酷い見かけほど重い怪我とかしてませんから。」

診ていたタマモがそう言ったので、その言葉を信じカズマ達は柳洞寺を後にする。

キャスターの強襲（後書き）

次は再び間章です。

カズマにやられて逃げたキャスターが何をするのか……次も読んでくれればわかります。

感想などを送ってくれると嬉しいです。

間章・共闘戦線（前書き）

共闘戦前をはる二組のサーヴァントの話です。

ここまで、作者の拙い文章を読んでくださってありがとうございます。

間章・共闘戦線

今にも崩れてきそうな廃屋の中に人影が２つ。
キャスターとマスターである葛木宗一郎である。
目下、２人は逃亡中。

キャスターがカズマ達の追撃を恐れ、今は冬木の町の郊外にある人々から忘れられた廃工場に身を潜めている。

キャスターが今いる廃工場の周囲を見渡し、ギリッと唇を強く噛みしめる。口の端から血が流れ、荒れ果てた地面に落ちていく。

カズマ達に迎撃され、自身の居城であった柳洞寺を捨てなくてはいけなくなったのがよほど悔しいようだ。

……

しばらくたち……

キャスターが不意に俯いていた顔を上げ天井を見上げる。……天井と言っても屋根がほとんど剥がれ落ちていてなくなっているので上を見上げると空が見える。

関係はないが…今日は空は雲1つなく、半月の形をした月の綺麗な夜である。

「無様だわ。」

ため息と同時にキャスターが声を絞りだし呟く。
呟くと腹から胸にかけて凄まじい激痛が身体中にはしる。

呼吸が出来なくなり、嘔吐感が胃から競りあがってくる。それを耐えるため背を折り地面に伏せる。痛みが薄くなったら再び体を元の体勢に戻す。

「……ハァハァ。ダメね、流石にすぐには治りそうにないわ。」

キャスターは今、自身の身体に治療用の魔術をかけている。

神代の魔術を行使できるキャスターでも、瀕死状態だった体を治すには相当な時間がかかる。

なんせ常人なら間違いなく即死級の蹴りをもろに喰らったのだ。カズマは浅いなどと表していたが、それでも十分な威力を持っていた。

「大丈夫か?キャスター。」

側にいた宗一郎がキャスターの身を按じて声をかける。

「心配には、およびませんわ、宗一郎様。少し傷に響いただけですもの。」

「そうか。」

そういって宗一郎は黙りこむ。

キャスターは考える次なる策を。

（宗一郎様と私が、こんな夜風も防げないようなあばら家に身をよせなくてはならないなんて。かつては、世の栄華を手中に収めた、この身だというのに。）

手を強く握りこむ。

（ああ、我が身の不幸が恨めしい。）

「あの坊や、この恨みは必ず……！」

その言葉には、まるで呪いのような力が込められていた。

ただ、その恨みを果たすためには問題がある。

（しかし、今のままではあの坊やには勝てない。' アレ' はサーヴァントで言えばセイバークラスの力をもっているし、サーヴァントも2体もいる。事実サーヴァントが3体いると考えいいでしょう。……それにひきかえ、私が召喚したアサシンはあの山からは動けない。）

思考に耽るキャスター。

（…もっと手駒が欲しい。奴に対抗しうるだけの強力な手駒が…）

色々な策を考えいるキャスターに珍客が訪れる。

「よう、キャスター。今は随分とみすぼらしどこにすんでんだな。」

廃工場の柱の影から姿を見せたのは全身青タイツで朱色の槍を携えたランサーだった。

ランサーは飄々とした口調でキャスターに話しかける。

「貴様！ランサー、いつの間に！！」

キャスターは立ち上がると同時にランサーに向かって魔術を発動させる。

「おっと、あぶねえ。」

一直線に飛んでくる魔力弾をランサーは悠々と横にかわす。

「くっ。」

ガクッと膝から崩れ落ちるキャスター。

当たり前だ、立ち上がるという動作だけでも今のキャスターの身体には負担がかかるのに、魔術まで使用したので負担が倍増して激痛

が身体に駆け巡る。

「おいおい、大丈夫か？」

膝まずいたキャスターにランサーは近よっていく。

その前に宗一郎がランサーとキャスターの間に割り込んでくる。

「……。」

宗一郎がランサーに無言の圧力を飛ばす。

「そんな睨むなって、今日は別に殺しあいをしに来た訳じゃないんだ。」

「……？では、なにようランサー。」

「その前に、確認だ。キャスター、お前にそこまでのダメージを与えたヤツは……黒髪の人間の男じゃないか？」

朱色の槍を消し、攻撃の意思はない事を示しながら、ランサーはキャスターに問う。

「ええ、そうよ。なぜかサーヴァントを2体も連れている。若い東洋人。それがどうしたと言うの！？」

「やっぱりか……これはうちのマスターからの提案なんだが……聞くかい。」

「いいわ、聴きましょう。それが私の所に来た目的なのでしょう?」

「その通りだ。じゃあキャスター、あのカズマ……いや…あんた流に言えば坊やか。取り敢えずソイツをかたずけるまで' 共闘戦前' を張らないか。」

ランサーは真面目な顔でキャスターを見つめる。

「なぜ、とは問わないわ。貴方もあの坊やに苦汁を呑まされたというのね。」

どう、合っているでしょう、顔でランサーを見つめ返す。

「その通りだ。あのカズマって小僧にはしてやられたよ。」

フゥとランサーは肩を竦める。

「……いいわランサー。貴方と組みましょう。」

「おっ、そいつはこちらも助かる。断われたらどうしようかと思ったぜ。」

「それで、ランサー。貴方と私が組んで本当にあの坊やを殺すことができるのかしら……向こうのサーヴァントは2体、こちらも2体では、あの坊やの分だけこちらが不利だと思うのだけど?」

「大丈夫、大丈夫。カズマは、うちのマスターが相手するから。」

「人間が相手を……大丈夫なの？あの坊やの戦闘力はセイバークラス並みなのよ。」

「まあ、1人じゃかなり厳しいが、あんたのところのマスターとで2人がかりで戦えばなんとかなると思うぜ。」

「……」

「なんだ、自分のマスターを戦わせるになんか不安があるのか。」

「当たり前でしょう！」

「でも、こうでもしないとまた返り討ちになる可能性が高くなっちまうからな。……まぁ、諦めてくれ。」

その後、ランサーのマスターが現れ、カズマを倒すミーティングが開かれ、その場で三時間以上も続けられた。

……

こうしてランサーとキャスターは、対カズマのために一時的に共闘戦前を張ることになった。

間章・共闘戦線（後書き）

次は、本編に戻ります。

これからも頑張っていきますのでよろしくお願いいたします。

真名（前書き）

今回はバトルはありません。

セイバーとタマモについての説明の話になります。

相変わらずのグダグダの文章です。

真名

柳洞寺から帰還した、カズマ達はもうかなり夜もふけていたので、家に着くなり各々の自室ですぐに寝ることにした。

「それじゃあな。お2人さん、おやすみ～。」

「おやすみなさい、カズマ。」

「おやすみな～～さ～～い～。マスター、今日も良い夢を。」

難しい事、キャスターが何処に逃げた事、セイバーの宝具と真名については、朝。朝食を食べた後に話し合おうということになった。

……

その日、カズマは夢を見た。

セイバーの宝具である【エクスカリバー≪約束された勝利の剣≫】を見てしまった影響だろうか……彼女が過去に行ってきた出来事か夢に出てきたのである。

【エクスカリバー】……もっとも有名な伝説のひとつである、この聖剣の名は常にある1人の英雄の名と共に語り継がれてきた。

それが、英国史上屈指の大英雄アーサー王である。

異国の侵攻や散発する内乱によって、国土が混乱していた時代。

彼は、王たる資格を問うという選別の剣を引き抜きブリテンの王となった。

その後、魔術師マーリンや円卓の騎士らと共に十の年月、十二もの会戦を戦い勝利したという。

その間、常にエクスカリバーは王の傍らにあり。

やがて王は、実の息子であるモードレットリコロールの手にかかって命を落とし――。

その際、聖剣も元の所有者である湖の精霊の元に返却された。

こうして、アーサー王とエクスカリバーの物語は幕を閉じる。

……

時間は流れ太陽が東から登り朝になる。

明朝、５時１０分。

カズマの朝は早くいつもこの時間に起きる。

「ふぁ～～。よく寝た。」

頭の上で腕を組合わせ、背筋を伸ばしたら、さっさと布団から出て畳む。

ちなみにカズマが就寝した時間は、‐今日‐の２時過ぎであり、睡眠は３時間程度しかとっていないが心配はない。

カズマは中学生の時に軍隊の訓練を受けていたため、１時間３０分の睡眠で大概の疲れはとれる体に改良してあるのだ。

「さて、シャワーでも浴びてサッパリしますか～。」

襖を開ける。

「スゥーースゥーー。」

襖を挟んで隣の部屋で寝ているセイバーを極力見ないように、気持ちよさそうに寝ているので起こさないように足音を抑えて出ていく。

着替えを手で持ち、自室から出て風呂場に向かって歩き出す。

そういえば、セイバーが寝泊まりする部屋をカズマの隣の部屋にするときも一悶着あったのを思い出し軽く苦笑いする。

……

「朝シャンは気分いいんだよな～～。」

気分よく風呂場の扉を開けるカズマ。

この時、彼は周りをよく見ていなかった。

より正確に言うなら、脱衣場に自分以外の衣服が洗濯機の横にある青いカゴの中に入っているのに気がついていなかった。

よってこうなる。

ガラガラっと風呂場の戸を開ける。腰にタオルを巻き風呂場に入ろう足を一歩踏み出した瞬間、ライダーの魔眼より強力な光景によってカズマは石化する。

カズマの目の前には、全裸のタマモがいたのである。

「？？？？？？？？？！？！？」

いや、全裸と言っても見えているのは背中方だ！

たが…染みひとつない決め細やかな肌、くびれたウエスト、長く綺麗な髪とか、毛並みの美しい狐耳と尻尾がまる見えであった。

それだけでもカズマには少々刺激が強すぎたようで……。

タマモの姿を脳が確認したらカズマの口から人間が発音出来ない奇声が漏れた。

「マスター？どうかなさいましたか。」

カズマが入って来たのに気がついたのか、きょとんとした感じで顔だけ後ろを向けて、タマモがいきなり入って来たカズマに尋ねる。

タマモの顔は軽く頬が赤くなってはいるが、嫌悪感は一切ない。

タマモも朝シャンをしていたのだろう。全身が水で濡れていた。

そう、先客であるタマモがいたのである。

奇声を発したきり石化したカズマを不審に思ったのかタマモが振り返えろうとする。

「！！？！！！？！？。」

タマモが振り返ろうとした瞬間、カズマは石化を吹き飛ばし、神速のバックステップで浴室から脱出し光速の手の動きで風呂場の戸を閉める。

「す、すすす、すま、すまない。誰か入ってないかの確認を怠った。」

浴室の戸を壁替わりして背を預け、ヘナヘナ～と座り込みながらタマモに謝る。顔は熟れたリンゴのように真っ赤である。

「何も謝る事なんてありませんよマスター。むしろ今、この場で私を押し倒しちゃってもタマモ的には全・然・オッケーです。ドーンっときてください。あっ、もちろん他の場所でもかまいませんよ。マスターから誘ってくれるのを、タマモはいつでもお待ちしてますから。」

「その誘いはかなり嬉しいんだけどな～～。俺まだ高校生だし、そういうのはまだ早いかなって～。」

赤い顔を両手で隠しながら立ち上がろうとした時に、背後の戸が静かに開きタマモの両手がカズマの首に優しくまわされる。

「へ？」

咄嗟の出来事に脳の処理機能がうまく働かずカズマは間の抜けた声をあげる。

「マスター。大丈夫です。大抵の事は愛があれば赦されるんですから。」

耳元でささやいてくるタマモの言葉はものすごく淫靡な声色だった。

「た、たた、タマモ。」

振りほどこうとおもえばカズマの腕力なら容易く出来たのだろうが……布一枚なくダイレクトに背中に当たるタマモの豊かな双丘の柔らかさと、耳タブが優しくハムハムされるのが伝えてくる快楽がカズマの思考能力を奪い、理性がガラガラ崩れていくのが自身にも理解させる。

（「そういう事をするのも別にいっか。」）

と口走ってしまう十秒前に魔神が風呂場に入ってきた。

「カズマ。これはどういうことが説明してください。」

風呂場に魔神と化したセイバーのご登場した。

カズマの顔から一気に血の気が失せて真っ青になる。

「まてまて、セイバー。これには訳が！」

両手を前でブンブンと振りながら、なんとか弁解の言葉を頭の中で探す。

「ええ、では聞かせてもらいましょう。その訳を！！」

セイバーの顔の表情は笑顔だが目は微塵も笑っていない。正直気の弱い人なら見ただけで、気絶しそうな笑顔だった。

「このお子様騎士様は、また私とマスターの邪魔を！あっちいって下さい。」

タマモはカズマの背から頭だし、をまるで虫でも払うように手を振る。

セイバーの笑顔に凄みが増していく。

「キャスター…貴女とは一度2人りっきりでゆっくりと話し合おう必要があるようですね。」

「私にはありませーん。いいから早く出ていってくれませんか。」

先ほどまでの続きをしようとタマモはカズマに抱きつく。

「私のマスターであるカズマにふしだらな真似はするなと言っている！！」

近場にあった籠からなぜかあった、プラスチックで、できているある程度伸縮自在の棒をとる。

「む、やる気ですか。」

タマモはセイバーが棒を取り出した籠を手に取る。

カズマの前に出たタマモはいつの間にかバスタオルを体に巻いた。

カズマはそれを見て、ガッカリしたとも、ホッとしたとも見える複雑な表情をしていた。

「化けギツネ！いい加減にしてもらいます。」

セイバーのスキルの1つである' 魔力放出' でただのプラスチックの棒の存在感がみるみる上がっていくのが目に見えてわかる。。

棒を構えるセイバー。

「いい加減にするのはそっちだということをわからせてあげます！！」

籠の表面にどこからともなく取り出した呪符を貼りつけ、強化し…構える。

はたからみると、棒を構えた外国人の少女とバスタオルで身を隠しただけの女性が籠を持って相対している。

シュールだ。ものすごくシュールな光景だ。

「ハァァァァーーー！！」

「えぇーーーーーい！！」

2人が同時に踏み出した。

「え。ま、まて、2人共。」

カズマは制止の言葉をかける。……が。

カズマを真ん中に挟んでサーヴァント2人が戦うには決して広いとは言えない風呂場と脱衣場で衝突した。

ドゴォーーーーーーン！！！

……

結果だけ言うと……風呂場と脱衣場が完封なきまでに破壊され、ケンカ終了後、直すために建設業の人を携帯電話で連絡をとり、専門の人に家まで来てもらい風呂場と脱衣場の惨状現場を見てもらうと修理には2週間前後かかるとのこと。

この間は、少し離れた所で営業している銭湯に通うことになった。

カズマ宅リビング。

騒動を起こし、マスターであるカズマの家を一部破壊してしまったことがよっぽど堪えたのか、タマモとセイバーは小さくなっていた。

「セイバーもキャスターもあんま気にするな。家なんて金さえあれば直るんだから。」

カズマはなるたけ明るく接する。

「でもでも。本っ当にごめんなさいマスター。」

「本当に申し訳ありませんでした、カズマ。」

2人が勢いよく頭を下げながら謝罪する。ケンカ終了してからもう何回もされている。

「謝るのは本当にもういいって。……それよりはセイバーに聞きたいことがある。…セイバー……お前の正体はー！。」

3人の間に無言の時間ができ、一陣の風が吹き抜ける。

その間、カズマとセイバーの視線が絡み合い、覚悟を決めた顔つきでセイバーがカズマの問いに答える。

「たしかに私は、その伝説で語られたアーサー王に他なりません。」

「……！！」

予想はしていたが実際面を向かって知らされるとどんなリアクションをとればいいかわからすカズマは黙ったまま先のセイバーの話を促す。

タマモも興味あるのか、黙ってセイバーの話に耳を傾けている。

「今のままで、隠していてすみませんでした。ですが、この真名はあまりにも有名なので敵に漏れる可能性を最小限に止めたかった。」

セイバーは真面目な表情なまま話を続ける。

「エクスカリバーの不可視の鞘も、敵にその銘を悟らせないことが目的だったのです。」

「セイバーがこの極東の国にまで名をとどろかせているかのアーサー王なのは正直ビックリだ。なんといったらいいのか…上手く言葉が出てこない。」

カズマは、軽く頭を掻きな言葉に詰まるの見て、セイバーは優しく微笑む。

「そう難しく考える必要はありません。私は私です。」

「はい。はーい。質問あるんですけど～～。」

タマモが、片手をあげる。

「セイバーは女の子ですよね～～。」

「キャスター……貴女の眼は節穴ですか。それともまさか貴女にはこの身体が男性のものに見えるとでも?」

ふるふるとタマモは首を横にふる。

「セイバー、キャスターはこう言ってるんだ。あの時代に女性が王になるなんて無理なんじゃないか…ってね。」

「その通りです！」

「それは簡単です。私は性別を偽って王位を務めたのです。なにせ、女性が王になるなど許されない世の中でしたから。」

「マジかよ。」

カズマとタマモは信じられないといった感じでセイバーを眺める。

あの大英雄であるアーサーが実は女性……意外すぎる。

「でも、なんでそんなことを？王座なんて普通、男が就くものだろう？」

「そうですね。それを説明するには、まず私の生い立ちをお話ししたほうがいいでしょう。」

セイバーの出生については説明文長いので、割愛します。

詳しく知りたい読者の方々は漫画のフェイトの七巻、もしくはゲーム本編を読むなり、プレイして下さい。

「ーーーそうして私は、剣を引き抜き王となったのです。……思うに、王に求められる資質とは国家の役に立つこと、それだけであっ

て、性別など些細な問題だったのでしょうね。」

「やっぱ、実際の人物の言葉は重みが違うな。」

「ですね～～。」

カズマとタマモが、ウンウンと頷いている。

「ところで……キャスター。貴女の真名はなんなのですか？勿論、言いたくなければ答えずともよいのですが。」

「私の真名ですか～～それはですね。」

タマモがチラッとカズマを見る。

カズマはタマモの意図を察して頷く。

「私の真名は、＇玉藻の前＇と言います。まぁ、昔は九尾の狐ともいわれていましたけど……本当は私って狐じゃなくて、神様なんです。アマテラス大神から分かれた御霊のひとつで、いわゆるいっぱいある神様の表情の一部なんです。」

「神様ですか……。」

セイバーはよくわかっていないのだろう、頭の上に？マークを乱舞している。セイバーは西洋の英雄だから東洋の神様の事なんて詳しくないだろうからよくわからなくてもしょうがない。

「俺は、普段はタマモって呼んでる。あと、タマモは現状全力は全く出せない。なぜなら。」

ポンっと隣に座っているタマモの頭に手をおく。
タマモは気持ちよさそうに目を細める。

「このタマモは'玉藻の前'の良妻になりたいという願いを実現させる為に英霊になっているからだ。この状態では彼女本来のスペックを発揮出来ない。」

「では、全力を出すにはどうすればよいのですか。」

「私、全力なんてだすきないです。と言うか出せませんし。今は私は英霊としてここにいますから。全力を発揮するとなると一度殺られて、再召喚の際に悪霊、荒御魂として呼ばれなきゃムリですし。」

「そして、俺はタマモを殺らせるつもりは一切ない。」

とカズマははっきりと言い切る。

ここで、この真名に関する終了した。

話が終わり、学校が休みなので皆で敷地内にある道場に移動し、組み手をして軽く汗を流すことに。

「カズマ、昨日柳洞寺に行く途中で一度引き返しましたが…あれはなんだったのですか？」

竹刀で打ち合いながら質問をしてくるセイバーにカズマは後方へ一旦距離をとった。

「あれか……あれは、キャスターの置いていったあの短剣の宝具を隠すために戻ったんだ。せっかく奪った相手側の宝具だ。みすみす返すこともないからな。見つからない場所へ移動させて隠してやったんだ。」

接近し、再び竹刀で打ち合うカズマとセイバー。

暇潰し程度の感じで試合っていたが、けっこう熱が入り昼頃まで続けた。

昼御飯を食べ、夕食の時間まではパソコンやタマモの使い魔を飛ばし情報収集に使った。

パソコンを使い情報収集わするカズマを見てセイバーは。

「こんな機械の箱で何か分かるのですか？」

「いいかセイバー。今の時代、まず集めるモノはは情報だ。時代は情報戦！情報を制した者が戦いを制するのだよ！」

「はぁ、そうなのですか？」

セイバーにはよく解らない話だったらしい。目が虚ろになっていた。

パソコンをつけたまま、席を立ち、縁側まで移動する。

「タマモ、なんか目新しい情報はあったか？」

タマモは申し訳なさそうに、ふるふると顔を横にふる。

「すみません、マスター。今のところは……。」

「気にするな。そんなすぐに入るとは俺も思ってはいない。」

縁側からパソコンのところまで戻り、椅子に座り画面と睨めっこを再開するカズマ。

午後は、そんな感じで過ごし時間が過ち……いつも夕飯とる時間となったので一旦切り上げて、少し前から夕食の準備をしているタマモと合流し夕飯を完成させて、３人で夕飯を食べる。

「「「いただきます。」」」

両手を合わせ食材に感謝を捧げてから食事を開始する。

夕食後は、風呂場が使えないので3人は銭湯に行くために着替え等を持ち家を出るのだった。

真名（後書き）

次はできれば、銭湯の話にしたいが……どうなるかな？

感想等をありましたら送ってくれると有り難いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5594u/

フェイトステイエクストラ

2011年11月22日02時52分発行